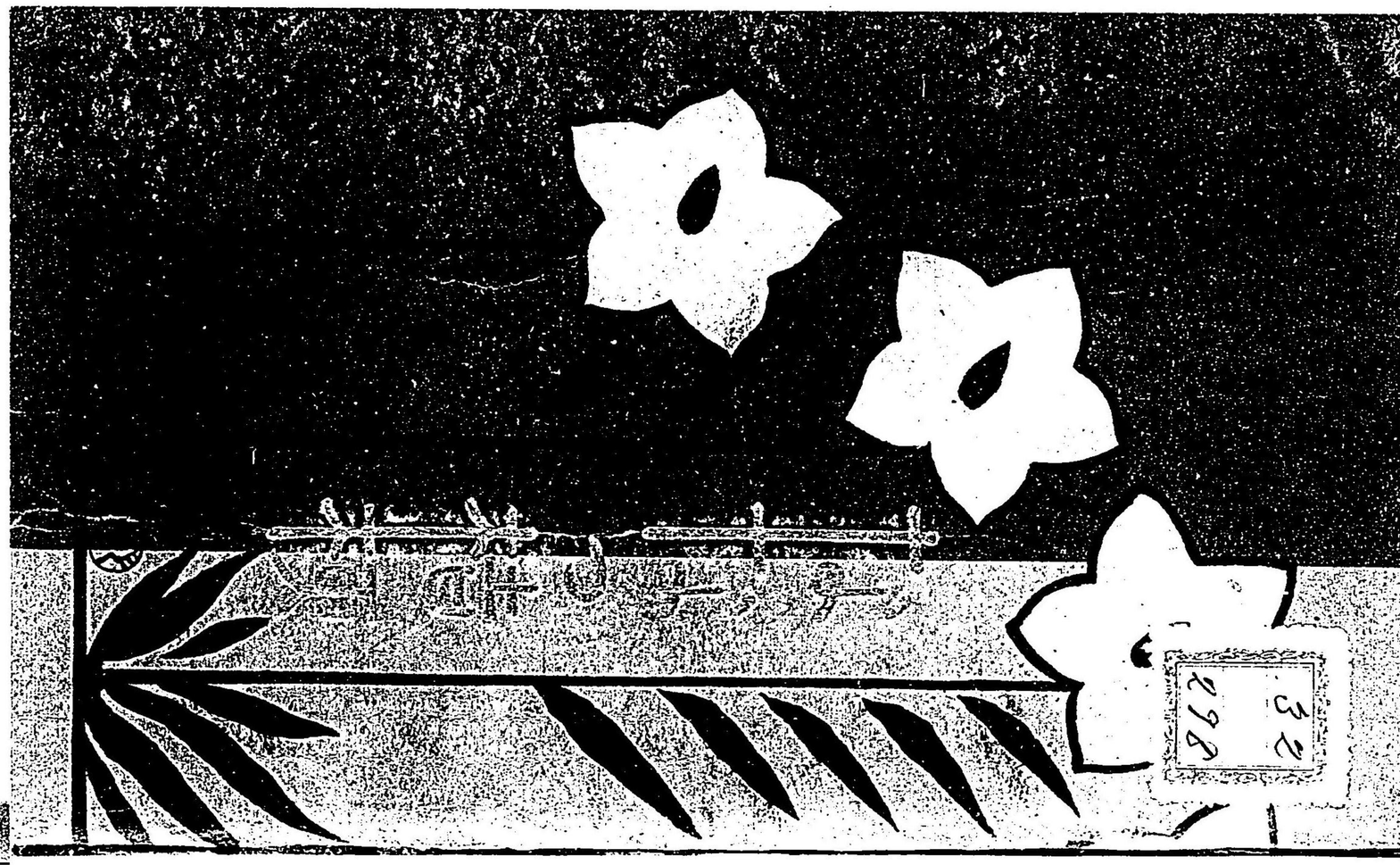
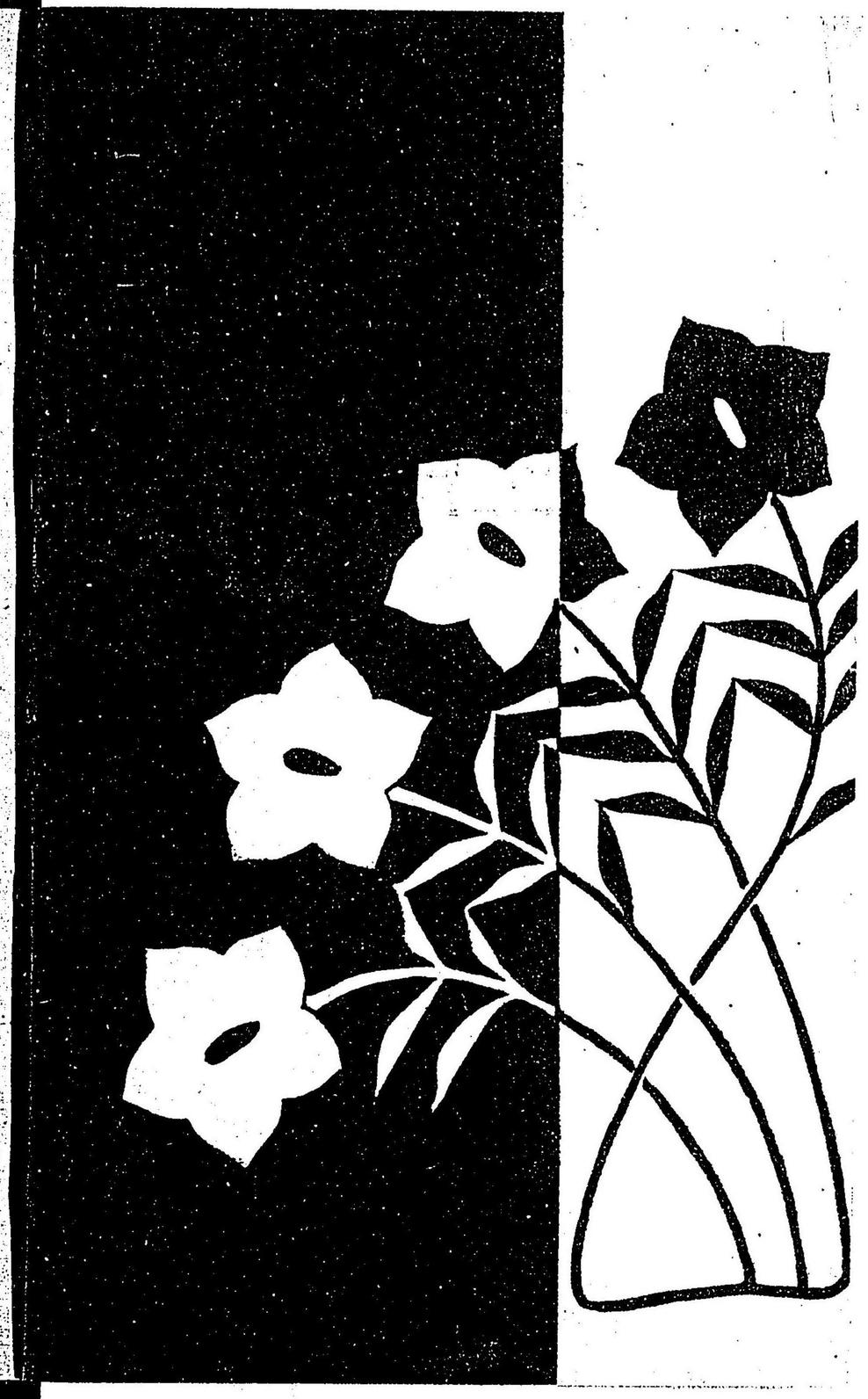


帝國圖書館藏

桔梗

紫紅作

明治
39 9 20
内交



著者の承諾
なくして上
場を禁ず

坪内先生より發行者へ送りたまわりし書簡

御遣しの稿本病床なから通讀いたし候ところ在來の作に見えぬ新しみ少なからず流石に若手のお作と感心いたし候『さら〳〵越』『日蓮雨乞』など誂もむづかしくなき故すぐにも舞臺に掛かるべく候音曲入なるは少々難題らしき注文もあるかと打傾かれ候へど

これも俳優の工夫次第にて新趣味あるところ嬉しかるべくや脚本ひでりの當節かゝる作者出でられ候こと悦ばしく候御出版然るべしく

月日　　逍遙

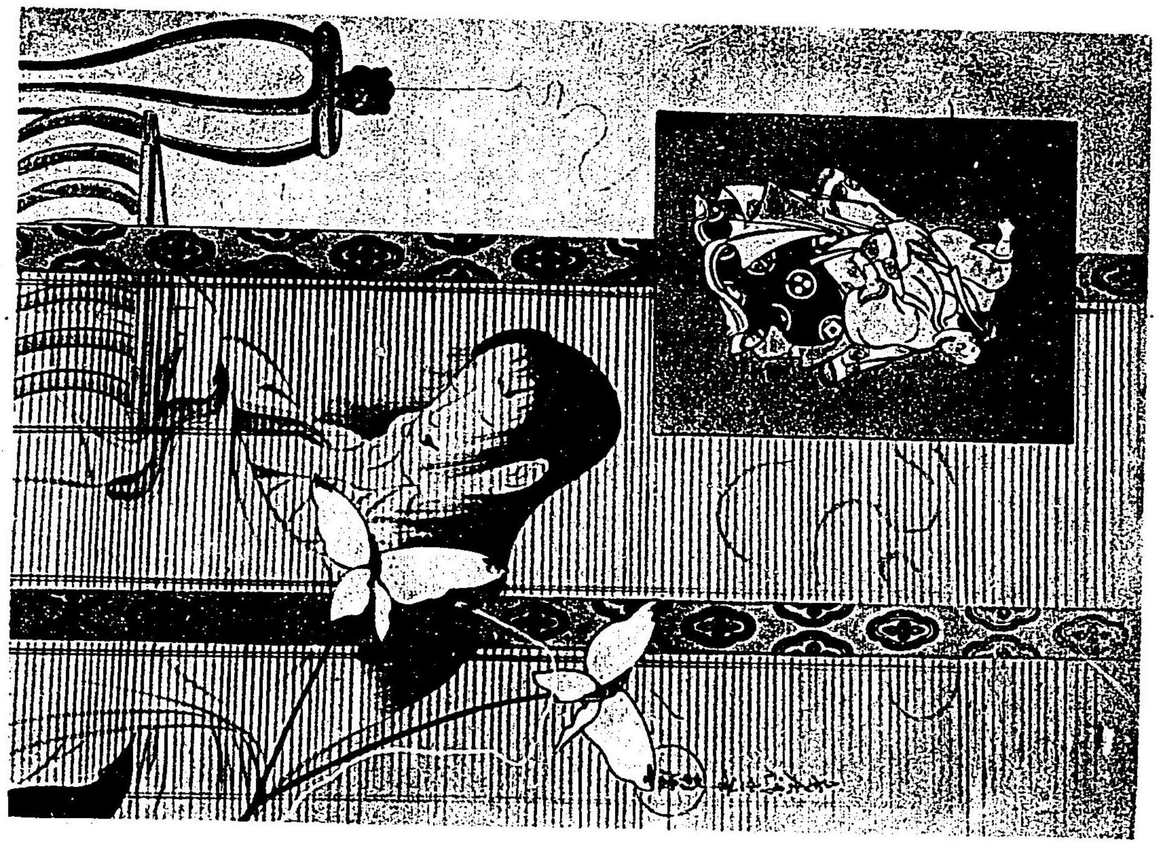
これを序文代りに此のまゝ御つかひなされてよろしく候

森鷗外先生題句

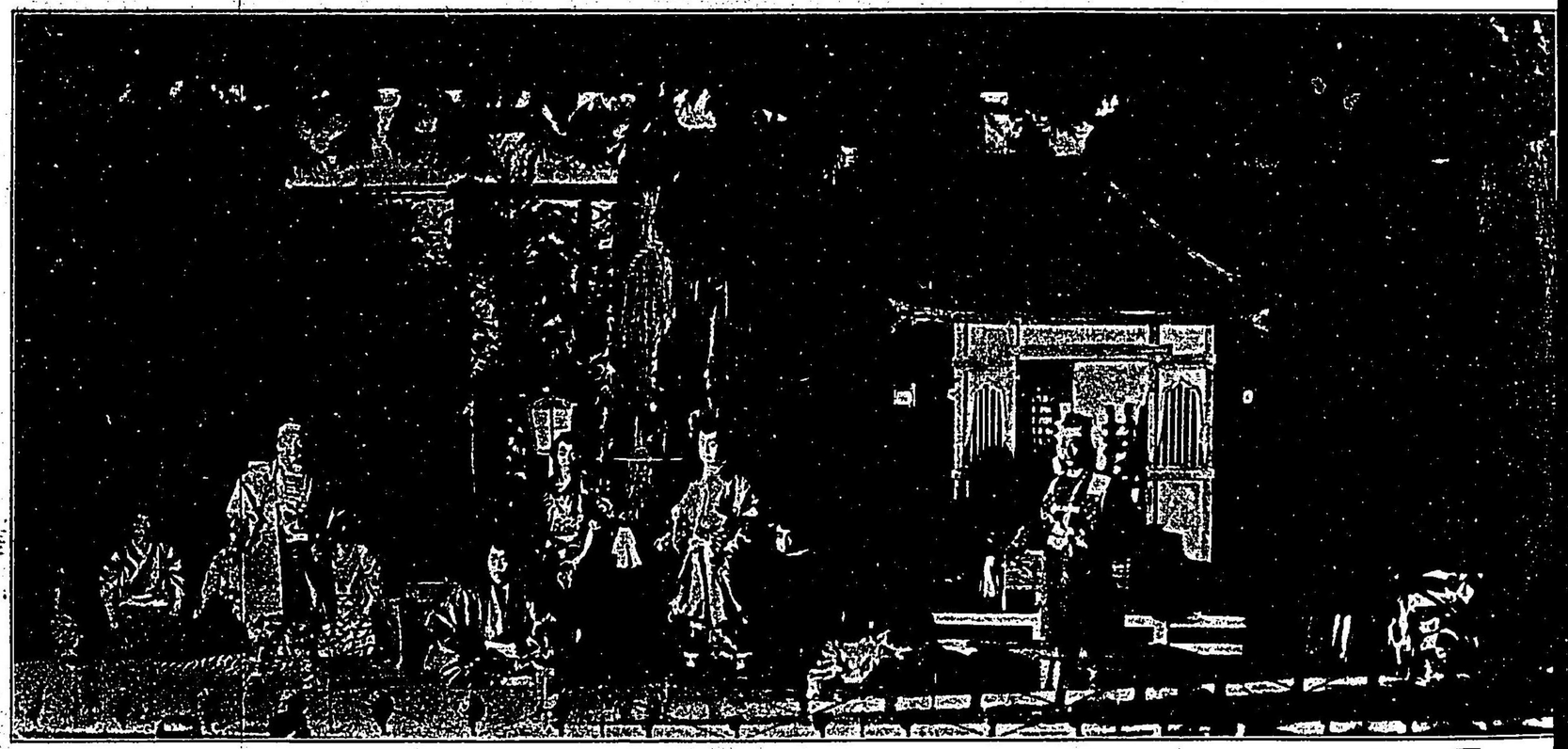
紫紅か『なゝつ桔梗』の巻首に

きちかうや眼汝かために青し

歸休菴



明治三十九年五月眞砂座興行　『上杉謙信』　謙信（伊井）　妙高（芝若）



『上杉謙信』の幕切

謙信（伊井）赤倉五郎（村田）字佐美駿河守（福島）等

目次

上杉謙信……一
女郎鄙……二五
底倉湯……四三
日蓮雨乞……六五
桶狭間……八五
甕破柴田……一〇一
左良左良越……一三一

挿畫

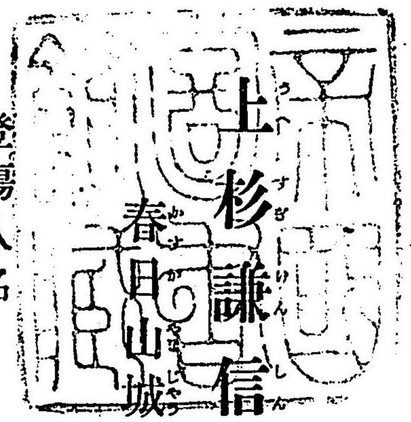
裝釘畫……杉浦朝武氏
女郎鄙……鳥居清忠氏
上杉謙信『大判二葉』……寫眞

七つ梍梗

上杉謙信

春日山城内奥庭

（天文二十年八月のこと）



登場人名

長尾平三景虎

後、上杉政虎入道謙信

上杉謙信

山崎紫紅著

七つ桔梗

上杉民部太輔憲政　凡四拾歳
宇佐美駿河守定行　凡五拾歳
赤倉五郎國武　貳拾壹歳
侍女　妙高　拾八歳
實は赤倉五郎妹妙高
侍女　小鹿
同　宮路
同　小杉
同　明石
近侍武士數名

春日山城内の奥庭、少しく上手に寄せて歡喜天の祠あり、祠前には燈火を點じ、白木の三寶に瓶子を始め數々の供物あり、下手には老

松あり、月その上に懸りて皎々たり、上手に捨石あり、侍女四人下手より立並びつゝ三寶に載せたる供物を取次ぎて祠前に供ふ。一二回にして終る。尤も下手に近き侍女明石、

明石　是れで終りに成りました。

小鹿　やれ〳〵漸く濟みましたか、ほんに女の分際で、神主らしい御供へもの。

宮路　頼うだ方は御年若ぢやに、さつい信心。毎日毎夜の御參拜。

小杉　殿振りも一段と、風流なお生れつき、其上に武勇達者の御軍配。

明石　揚卷を敵に見せた事はなく、人に勝れし荒武者でも、戀の道には一向御初心。

小鹿　御添伏も定まらず、ほんに何處の姫御寮が、お腰入の初契えゝもそれを思へば、氣の苛れる事ておじやるわいなア。

宮路　小鹿御、いまだ知らずにか、頼うだ方の戀人の目前におじやるを知らず

とは、さても鈍な眼ぢやな。

小鹿　なに、我君様に戀人がある、それはまた誰ぢやわいな、早く聞かせて下されや。

小杉　さても小鹿御のけうとい口のききざまや、御城に奉公しながら、まだそれを知らぬとは、噂宮路殿。

宮路　されば小鹿御の眼はほんの節穴ぢや、お身あの御月様が見えるかいの。

明石　宮路殿、さうは虐めぬものぢや、有様は妾も知らぬ程に、どうぞ敎へて下されや。

宮路　明石御も知らずとあらば、敎へても遣りませう。

小鹿　早う聞かして下され。

宮路　頼うだ方の戀人は、御城内に、おじやるわいなア。

小鹿　なんぢや、御城内に、おゝ耻かしい。

小杉　何が耻かしい、顏を隱して、おほゝゝゝ、小鹿御の我れ惚れか。

皆々　おほゝゝゝ。

小鹿　何を笑やるぞ、何時ぞや我君様が、小鹿其方の顏は名の通り面白いと仰有つたは。

宮路　小鹿御、戯言は止めになされ、聞きたうなくば、語らぬまてぢやに。

小鹿　聞きたいから願うて居るてはないか。

宮路　頼うだ人の戀人は、あの妙高殿ておりやるわいな。

明石　なんぢや妙高殿、今夜の番の妙高殿、ああ果報ものよな。

小杉　あれ、その妙高殿が、夜詰の姿で參られまする。

侍女妙高、白張を着て上場。

妙高　我れ耻かしき此姿、(侍女等に向ひ)皆様御苦勞にござりまする、神前への供へ物は整ひまして候や。

小鹿　大果報の妙高さま。

宮路　幸福ものの妙高さま。

小杉　あたお目出たい妙高さま。

明石　お羨ましい妙高さま。

小鹿　御神前の御供物は、蕎、大根、南蠻辛。

宮路　小栗、柑子、柿、茸子。

小杉　豕の油も二升三升。

明石　準備落なく揃ひましたが

小鹿　まだ有合さぬ桂男、

宮路　月の都を立出でて。

小杉　程なうここへ。

明石　天降らうぞや。

侍女下塲、妙高祠前に至り、立ちながら拜を爲しつつ供物を調べ、祠の上手に敷きある筵の上に坐せむとしながら、

妙高　いま侍女達の嬲れる言葉、嬉しい中にも悲しき心地、忍ぶ草は秋なりと、て萠えづるものか耻かしや、戀はかくまで孱弱いものか、父の敵長尾平三景虎といふ人が、何として懷かしいか、心に邪見の刃を磨く、女の胸にも宿る月、うら表なき景虎様、御氣性は鋭を割つたる鮮やかさ、鋭き嫉刃も曇りやすい米山嵐、礫の雨、後では霽るる嵐のさまが欲しいものぢや、愁結かへる雲の幕、霧の闇を脱け出でゝ、眞如の影が宿したい、ああ情ない父上様、そも何つの世に恨あつてか、戀しい、ゆかしい、懷かしい、我君様とは敵となつたぞ、今生に殘れる娘の、天とも日とも頼んだ人と、仇敵とはなられたぞ、恨めしい父上、憎らしい父上、宿世にいかなる惡緣の、いま妙高とは生れたぞ、とはいへ父が亡ぼされしは、單へに君の采配なれば、敵は正しく敵なれ、名

のみに戀は立ちたれども、孝は微とも疞くしはせず、戀と孝とを秤量にかけて、何れが重い、えゝ悲しい情ない、依然孝は重いのぢや、戀に捨てなむ命もがな、その樣な命があるなら妙高は欲しい、二つの生命がもしあらば、あ妙高がなんで敵を持つた景虎樣を敵に持つたぞ、あの朗かな御ン聲、濃きおン眉、涼しき目元……

景虎　柱に倚りて倒るる樣に莚の上に坐す、景虎上場。

妙高　妙高如何致した。

景虎　是は我君樣の御參詣にも心付かず、無禮の段は幾重にも御免し下さりませ。

妙高　妙高幣を取りて景虎を祓ふ、景虎恭しく拜を爲して祠前を退き、

景虎　妙高、是へ參れ。

妙高　ハア。

白張を脱ぎ、庭に來りて跪く。景虎は上手の石に腰を掛けたり。

景虎　歡喜尊天への奉公、祈願を成就なさしめむには、清き女の血汐を贄に捧げよと驗者は申せど、一人の祈願の爲に罪なき者を屠らむこと、非道の至と辭みしに、さあらば百日の其間、少女を神仕へに致せといふ、さる間汝達が毎夜々々の宮仕へ、其身に應せぬ業、さぞ辛勞にありつらむ。

妙高　數には入らぬ賤しい妾達への御言葉、たとへ火に入り水を踏むとも我君への忠義とあれば、命捨つるも惜からず。

景虎　其言葉に僞りなくば、かねてよりの詞の端々、渡りに便船はなど貸さぬ、我れ生れ付きて短慮の性なり、一日に一事を爲すを以て足れりとせず、事に透間のあるを忌む、未明より軍馬の驅引、あるは諸家の陣法、繩張の鍛錬に心を休むる折もなく、明くるも暮るるも軍の手配、唯おことと語らふ隙間のみ、閏月の心地なす、諸家より櫛の齒を引く如き、緣組の申入にも耳傾

けぬ景虎は、始めて戀の味ひをおことの爲に知りたるぞや、いかなれば心強くも我意には隨ひたまはぬ、人目もあらぬ奥庭に、幸ひおことと我との

妙高　み、心の中ぞ聞かまほしけれ。

景虎　大河に潜める鯉の肚には苦き肝の候へど、溝の泥に住む鮒の、賤しき身には何として語りあげむ答あるべき。君は尊き梢の御ン身、吾身は地をはひまはる、かづらよりも果敢なき身、日に日に勝る園原の、木賊の如き憂き思ひ、心の利鎌に苅り兼てこそ候なれ。

妙高　言葉巧に申されしが、系圖を望む景虎ならず、おことの姿、おことの心、あはれおことこそ、我れに叶へる女ぞ、一國一城に久しく過ごさむ我にはあらず、天地にあることならば、いかなる望も叶ひ得させむに、我に隨ひたまはずや、や、答はなくて、そも何の爲めの涙ぞ。

砂高　嬉しき仰せ、ああ御ン言葉を止めさせたまへ、妾の心は僞りなき、誠を籠めたる涙の玉にそれと御知り候へかし。

景虎　富貴を以ても奪ひ難きに、益す募る我が思、所詮おことの心中には、女の身にて代へ難き、貞操といへるもの、潜みありと見しは僻目か。

妙高　心に潜めるものとては、君を思ふ誠にこそ侍るなれ、おン心に隨はば、色に溺るる醜の名は、御ン名の上に蒙りたまはむ。

景虎　いいや、いかに云ふとも、おことの胸は水鳥の下安からぬ騒ぎあらむ。

妙高　狹き女の心には、他言入るる席は候らはず。

景虎　然と左樣か、未だ熟せぬ柿の實は、霜の來るを待つべけれど、もし盜人の忍び入らば、澁しといへども拂ひ落し、決して他人に與へぬぞ。

妙高　次第に月に雲かかりて昏くなる。底に包める疑の、晴れやらぬ雲の月をば、おゝ暗くとも心は月夜。胸に藏せる短刀を撫でて泣く。

妙高　我君様、女の身の一大事、此御返事は東明の御参拜まで御待なされて下さりませ。

景虎　待てとあらば待ちもしつべし、既に思案も幾度か、潮の満干も重ねし望月、満つれば缺くる十六夜の、汐の下りにならぬうち。

妙高　胸推し開くおン返事。

景虎　吉左右を待たうぞ。

老臣宇佐美定行慌だしく上場。

定行　我君、是に入らせられたか。

景虎　定行か、其方に似ぬ慌だしさ、何事の起つたぞ。

定行　思も寄らぬ一大事、目下上野に御動座の管領山之内家殿、只今参着致され、夜陰ながら火急御面談ありたきとのこと。

景虎　管領自身に参られしとな。

定行　供廻りも手薄にての御入、乗ねて隠密共の申すにも違はず、堺を追はれて來りしものなるべし、恐れながら御賢慮いかに。

景虎　窮鳥懐に入るときは獵師も之を捕ふるごとなし、況んや長尾は上杉累代被官の身なり、且つは景虎弱冠にして、未だ漸く一國に主たるを、頼むとあらば惜からぬ命は一期、名は末代、頼まれうと思ふがどうぢや。

定行　定行感じて手を拍ち、

定行　したり管領殿に逢ひ参らせてより、某の考案漸く今に其處に到り候げに掌は拍てば鳴る、此上は直ちに御對面。

景虎　夜中ながら見参に入らむ、妙高歡喜天への奉公よく心せよ。

景虎定行を從へて下場。

妙高　ああ我胸のせつなさ、つらさ、大千世界を賜ふとて、代へはつまじき御ン情。

月出づ、松の蔭より赤倉五郎國武出て來る。

赤倉　妙高、々々。

妙高　兄上か。

赤倉　叱ッ。

赤倉五郎は莚を取りて地に敷き、妙高を坐せしめ、自身は老松の幹に腰を下ろし、

赤倉　いかに妙高、御ン身を此城中に奉公させしも、單に敵景虎を討たむが爲めなり、所懷を漏らして既に百日に餘れども、未だに好き耳なきは、戀に性根を奪ばれしよな、女心と云ひながら、現在父君の敵を捨つる不孝の女め。

妙高　不孝とのみ仰あれば、更に二の句は次ぎ難し、さりながら兄御前よつく聞きさむらへ、館を父の御敵とは奉公の始にはなど聞かせたまはぬぞ、思ふ仔細のありとのみにて、つい館殿へ仕へ申せば、世に珍らしき慈み、御情は五臟六腑に浸み渡り、恐れながら兄上よりもゆかしく思ふを、敵とは疎ましや、情ないは兄上、只一人の妹に、生半大事を包みたまへばこそ、始より敵と知らば、よも、心の錠は許さじものを、情ない、冷たい御心根、不孝の娘には誰がした、不孝とは其の冷い唇から、よくまア仰せられましたな。

赤倉　そは、某が過なり、それを度々宣ふは、唯に兄を苦むるのみ、始より打明けねば、可愼とは云ひながら、さすが女の思慮淺く、漏れもやせむとの懸念なりしを、さのみ咎めは候ひそよ、さはいへ過ちは兄の事、敵は父の爲めならずや。

妙高　されば討たぬとは云ひ侍らず。

赤倉　さあらば何とて今夜の如き、働き時をば知らせたまはぬ、彼一人と相討せば、いかに猛しと申すとも、本意を達せむは易かりしに、惜しき時を去なせしも、單に御身の迷ひ故ぞ。

妙高　迷……戀……

赤倉　戀を捨つるか、命を捨つるか、兄と妹の分れの返事ぢや。

妙高懷劍を示し、

妙高　戀を……戀を捨てやう、……今宵を去らず敵を討たう。

赤倉　父の遺物に誓を懸けて、討つと云つても女の腕、その懷劍にては危き事なり、勇士を亡すには近頃卑怯に似たれども、弓矢神も御免あれ、此一藥は烏頭の毒、それなる神酒に之を混じ、命を縮め申されい。

妙高　すりや其藥を、

赤倉　それなる瓶子に。

赤倉瓶子に藥を混じ、

赤倉　我れは木蔭に忍び居て、事の成就を相待つべし、父への孝を忘れたまふな。

赤倉下塲。蟲聲起る。妙高懷中より紅筆を出し、懷紙に遺書を認む。終りて懷劍に卷付け推戴きて懷中に藏す。景虎上塲。

妙高　や、や、我君樣の不時の御入は。

景虎　歡喜天の御ン加護か、我が運命の幸先は今宵より開くるぞ、この喜悅を尊前に申さむ爲めに來りしなれ。いかに妙高、音にも聞きつらむ關東八ケ國の管領上杉殿、我れを猶子として上杉の姓を與へられ、管領職まで讓られたり。なほ其上に愛娘鶴姫殿を妻合さむとありしを、達て否みし心中は、既に汝は知り居る筈、かくまで思ふを振捨てて、白晝の如き月にも耻ず、御寶前にて男と語らひ、我に耻辱を與へしは、近頃以て不思議の擧動、不屆の女め。

妙高　お情なき其御詞、なにしに妾が……

景虎　いふな女、千軍萬馬の合戰の街も、鎧の縅の袖の色さへ、見誤らぬ景虎の

眼は淨玻璃、入るを許さぬ庭内に、物語せし男は誰そ。

妙高　答を爲さず、賓前の瓶子を取りて地に擲つ。

景虎　や、神に向つて狼藉なすは、分疏なさの狂人もどきか。

妙高　御身の願を碍げむ爲め。

景虎　無禮ものめ。

一刀の下に妙高を斬る。近侍驅け來る。

景虎　何事ぢや。

近侍　御庭内にて曲者を召捕りました。

景虎　是へ引け。

近侍　はッ。

近侍下場。景虎刀にて妙高の死骸を指し、

景虎　地獄の道の案内者は追付け後より遣はすぞ。

赤倉五郎繩に掛り、近侍數人に護られて上場。

景虎　我が城内を徘徊せる曲者、そも己れは何者なるぞ。

赤倉　我こそは汝が爲めに亡びし、黑田和泉守國忠の嫡男に、赤倉五郎國武なり。父の敵を狙はむと、多年の苦慮も盡餅に歸し、かく捕はれし上からは、早く首を撥ねられ候へ。や、や、妹も討たれたるか。いかに景虎殿、その亡骸こそ某が唯一人の妹にて候ふぞや、假令本望は達せずとも、兄妹一時に敵の手に死せむは勇士の本懷なり、片時も早く某を冥土の旅に赴かされよ。

景虎　妙高は汝の妹とか、瓶子を取りて地に擲ち、我が信心を侮りし故、只一刀に息を止めたり。

赤倉　や、や、なに瓶子を擲ちしとか、萬に一つの望も同じく微塵に失せたるか、天下に友なき我等が身の上、誰か志を接ぐものあらむ。いざ此上は包まず語り申さむ、某他國を旅せる中、父は御身に討れたまひ、その無念遺る方

なく、君を狙ひ申せども、警固嚴しく及び難かり、妹に申付け、傳を求めて御傍近う仕へさせ、やがて大事を打明けしに、戀はあはれにも憎きものかな、何時かは君を思ひ參らせ、兎角に孝を忘るる有樣、近頃卑怯、御蔑視も耻かしけれど、烏頭の毒を神酒に混じ、君を失ひ參らせむと企てたりしが、戀とはさても條理なきもの、己れが命を縮めてまで、敵の齡を延ばしたれ、その瓶子には某が秘藥を注ぎ候ひしなる。

景虎　ウム。

考へつつ妙高の死骸を見る。片手に持ちたりし懷劍を見て之を取る。卷付けたる遺書を見て驚きつつ讀む。

景虎　『この守り刀の子にて候ふ悲しさを、思ひ遣り下さるべく候、戀に沸きかへり候ふ血汐を贄に捧げて御武運を祈り候べく候かしこ』……景虎の軍神、命の親、三千世界の戀といふ戀を集め、情といふ情を蒐めて、唯一人の妙高にあり、御身の外には、未來永々、景虎に妻はなきぞ。

と妙高の死骸を抱く。

赤倉　爲すこと違ひし我に引換へ、妹は幸福もの、いざ景虎殿、御身を狙ひ、剩へ卑怯にも毒藥をもて害せむとしたる、赤倉五郎を斬りたまへ。

景虎　不便ながらも成敗なさむ。

景虎立ちて赤倉五郎の髻を切り、また繩を切る。

景虎　汝の命は今日が終り、今よりは此世に在らぬ人々に語らふべき法師の身ぞ、我も甲冑は纏へども、戀しき寐覺の折々は、亡き人に見え語らむ身となるべし。

自ら髻を切り刀を鞘に收む。上杉民部太輔憲政、宇佐美定行を從へて上坡。

定行　御主君へ申し候、人馬の手當整ひたれば、御用意あらうずるにて候。

上杉謙信

景虎　太儀々々、いかに御父上殿、長尾流の軍立を、何とか御覽候ひつる、

憲政　今夜頼みし加勢の人數を、鷄未だ鳴かぬ中に、はや出陣とは逸物の、應も及ばぬ神速なり、新管領殿の御働き、目醒しくこそ候なれ、不勝には候へど猶子の實を立つる爲め、あはれ名乘の一字を進らせむ、是よりは景虎を改めて、政虎と御名乘り候へ。

景虎　今は出家し候へども、武遍は捨てぬ某、今より上杉政虎入道謙信と名乘るべし、御父上殿、御息女を申受けぬは、この入道に察したまへ、仔細ありて一生不犯に過すなり、法體は仕れど、方便の弓に矢を接げ降魔の利劍を打振つて、程なく天下を靜ならしめ、塗炭に陷る百姓を、救ひ申さば其功德、經誦むには勝るべし。

赤倉　我れはそれには引換へて、習はぬ經を讀み覺え、鉦打鳴らし戰場の草の葉末に朽ち果つる勇者の後を吊はむ。

景虎　我れは父の慈、

赤倉　これは母の悲、

景虎　よし行は變はるとも、

赤倉　志は、

二人　一定なり。

鷄鳴く。

景虎　冬の來らぬ其内に、上野一國を切り從へなば、來む春の便りなるべし、いざ是れより直樣打立たむ。

（幕）

女邯鄲

鎌倉松ケ岡東慶寺
駿府城内庭中櫻狩
（時は寛永三年春）

登場人物

豐臣天秀尼（秀頼の女）　二十歳
尼　一露
尼　四人
女童　貳人
駿河大納言忠長　二十一歳

女邯鄲

忠長の室花の前　凡十八歳
朝倉左衛門宣忠（忠長の臣）　凡四十歳
山伏　貳人
奴　四人

欄間には金地へ秋草を描きたる上段の間より、御簾を洩るる短檠の光微かにて、しめやかなる春の夜は、東慶寺の精舍も眠氣を催す許りなり。女の童一人出て來り、御簾の下に跪き、

女童　申し上げまする。

天秀　（御簾の中より）何事ぢや。

女童　一露尼殿御歸院にござりまする。

天秀　一露尼が歸りしとや、是れへと申し候へかし。

女童　畏りました。

女の童下場。簾の内にて鈴を鳴らす。女僧四人左右より出て來りて氣色を伺ひ簾を揭ぐ。天秀尼法衣を着し、經机に倚り、經卷を誦讀し居る。一露尼以前の童に服紗包を持たせて登場。御前に至り平伏す。

天秀　一露には只今歸院致されしとな、旅の疲れもあるべきに、早速の見參大儀な事ぢや、してこの度の御用とは、變りし事にてありつるか。

一露　此度の御召、何事やらむと存ぜしに、思の外の御首尾、天下靜謐のおン喜び、上樣一昨年の大將軍宣下より引續きて大御所樣には太政大臣に任ぜられたまひ、また駿河樣には權大納言に昇らせたまふ、たとへ一旦の怨敵たりとも、尼上には正しく東照大權現の御孫なり何事なりとも御望み候はば、申立てられ候ふべしとの懇ろなる御上意。

天秀　妾に望あらば申せとや、尼の身なれば何事の、浮世に望のあるべきぞ。

一露　また駿河樣よりは、尼公に呉々も宜しく申傳へよとの御言葉、自然御用

もあらば何なりとも承はるべしと、世に確かなるをン仰せ。

天秀　駿河殿より妾へ言傳ありたるとか。

一露　この御香は安南より献上となりしめてたきもの、我が配分を聊かながら、天秀殿に頒たむとての御引出。

天秀　佛に仕ふる身にとりては香木こそ何よりの賜物かな、幼かりし其時は、暫時は共に遊び戯れ、稚な馴染の國松様、いまは權大納言忠長とて、時めきたまへど古を忘れたまはぬ御ン情(懐し氣に香を受取り)一露には旅路の疲勞はや眠藏に入りたまへ。

一露　尼を始め皆々下場。

天秀　(香を手にして、うつつなげに)あら懐しの國松様、何とて人を忘れたまはぬ桃山御所の花の宴、難波の城の月の席、御祖父君太閤殿下の古へは知らず、父、右大臣榮えたまひし其頃は、一門譜代の大小名、我が苟且の物見にも、綺羅を競ひし大阪の、榮華も盡きし元和の始め、落城の淺ましさ、この世からなる三悪道を、流轉の後の今の住居、音なふものは松風か、谷の水音猿の聲、大千世界に忘れられ、あるに甲斐なき比丘尼とこそ、思ひ切つたる天秀に、物思はする人や誰れ、昔語りの筒井筒、妹見ざる間に大人はしく、なりたまふらむ我はまた、烏羽玉の髪は剃られ、錦は墨に染められて……ああ思ふまじうとましや、佛に仕ふる尼が身ぞ。

座右にある火桶に香を少し入れ、その香に醉ひつつ、經机に倚りて眠る。御簾下る、蝶二つ舞ふ。

歌

春の夜の、朧にかすむ月影は、かへりて隈のなかりけれ。

謠

澤にも滿つる春の水、く、うかめる花を誘はむ。

忠長の臣朝倉左衛門宣忠登場。

朝倉　いかに申すべき事の候。

籠上る。天秀尼ありし世の姫の粧。

天秀　何事にて候ぞ。

朝倉　駿河殿より御迎に參りて候。

天秀　思ひ寄らずや駿河殿より何の爲にて候ぞや。

朝倉　是非をばいかで知るべきぞ。

諭　唯させたまへと、さし招けば、

歌　それふれ、やれふれ、奴共、花嫁御、花嫁御、南蠻渡りの天鵞絨敷いて、大事に御供せ、油の樣な酒飲ましよ、槍は振つても御駕な振りそ、いたいけ花嫁供してござる。

奴四人駕を擔ぎて登場。

朝倉　いざ御供。

歌　有りしにかへる供揃へ、鎌倉山を立出でて、白雲かかる箱根山、駿河の旅路幾夜寐む。

天秀尼駕に乘る。舞臺面暗中に變化して、駿府城内庭中となる。櫻花爛熳たる中に、錦の幕を張り廻したる一圍あり。

歌　それ春の花多しとは申せども、いづれ櫻にしくものの、なきこそ定か花の山、心も動ぐ彌生の日、池の汀の鴛鴦も眠りむさぼる風情なり。

錦の幕を撤す。忠長、天秀尼の秀姫、松と櫻との枝を持ちて立ちてあり。

忠長　柴の門も春は錦ぞしきにける

天秀　花ふきおろす峯の嵐を。

歌　諸羽を交す双つ蝶、花のわたりは立ち去らで。

兩人正面に出て、忠長は床机に、姫は跪く。

忠長　あら美はしの我妻や、御身の樣をたとふれば。

歌　あつき情のふかみ艸、くらべ方なき容色は、我が領内の不二の嶺か。

天秀　あら恥づかしの仰かな、君の姿は日の本に、

歌　誰れに較べん傳へ聞く、三十二相の御佛も、まのあたりなる御風情

歌　谷間に残る鶯の、宿を尋ねて籠の中に、養ひ得たる喜びを、何にたとへむ浦島の、子が玉くしげ函の蓋、とりて悔をばもとめなと、心にかかる花の雲。

歌　いやさな云ひそおん惠み、深きによりて今は唯、物憂き身をも忘れたり、我れも昔を思ひ出の、涙に沈む折々は。

歌　戀しや、戀しや、昔戀しと忍び音の、年月をこそ送りしに。

歌　殿の迎を蒙むりて世にある樣の有難や。

歌　そも古へは咲く花の、浪華に生を受けながら、人ともならで、東路に、捕られて下る海道や、汐見阪には打寄する、浪に心を冷しつつ、足拘山は霧こめて、失はれむと肝を消す、かくて漸く鎌倉の、緑も細き松ヶ岡、かひなきいのち繋げども。

歌　埋もれて唯果つるなれ、身は是れ四大、命は空、悟りかねたる尼が身は、只煩惱と拂ふなり、月の光をつつむ

歌　は雲よ、天にも障りあるものを、
深山の櫻時を知り、春は咲くもの尼ぢやとて、人ぢや、
女ぢや咲かいでか、二十四番の花かぜに、綻び初めて
花の色。

歌　たまたま人に訪はれては、朝の露のはら〳〵と落ち
て脆いと笑はれう、男禁制、南無佛、目にもろ〳〵の男
を見ず、口様々の人を云はず、菜摘み水汲む難行も。

歌　抑も何の爲めなれば。
谷間の清水に影を映し、笹紅はふくめるぞ、見する殿
御もないものが。
面にいつも白粉を、絶えせぬは何事ぞ。
柳は綠、花は紅、女は戀に身を果たす。

歌　我も自ら世を厭ひ、染めしにあらぬ墨衣、いつかむす
ぼる愛着の、燃ゆるも無理か胸の火の、よし焦熱の大
地獄に、墮つるも儘よ、君故ならば。

忠長共に舞ふ。

歌　嬉しき人の仰かな、我等の樣を譬ふれば、天にあらば
比翼の鳥、地にあらば連理の枝、昔玄宗揚貴妃の契り
も是に及ぶべき、熱き太息は通ひ來て、梅花の薫り前
髪の、濡るるもよしや春の雨。

舞止む。

忠長　姫には舞に疲れつらむ、いざや暫く憩ひ申さむ。

歌　花の陰に憩ふ、忠長の室花の前登場。
月も憂し、花をも憂しとかたくなな、狹い心も何から

ぞ、人に見せたい殿振りも、見せるが惜しい女氣や、よくも花見に放し鳥、元木放れて異木に通ふ、男心はうつり氣や。

忠長の前に來り、

花の前　我君には是れに入らせられましたか、いざや御立ち。

忠長　さまで急ぐな花の本、散るを惜まぬ心無の、雨にも似たる言葉かな。

花の前　いやさな云ひそ、咲くとも散るとも木の花の、詠めの隙はをしまねど、人の花こそ目に障れ。

天秀　目に障るとは耳、障り、共に契りし八千代の椿、二世も三世も夫婦ぞや。

花の前　夫婦とは誰が許した、親と親との緣結び、嫁入した自らの、外に女房のあるべきか、下れ、下れ、徒らものめ。

天秀　いかに我が夫あの女を追遣りたまへ。

花の前　我君あの徒らものは、何ものぞ。

歌　花には嵐の襲へかし、月には雲のかかれかし、浮世に花は咲くとても、ひとり寢ならば何かせむ。

二人の姫、忠長を引張りて振り。忠長の臣朝倉左衛門登場。

朝倉　こは何事にて候ぞ。

忠長　そちや左衛門、この場の始末を賴むぞよ。

朝倉　畏り候、先づ我君、御臺所も暫く此場を。

歌　時雨に傘を得し心地、幕推分けて入たまふ。

忠長花の前幕の内に入る。

天秀　我れも御ン跡。

朝倉　いや暫く待たせたまへ、申上ぐべき事の候。

天秀　えゝ我れを欺き恥辱を與へし、そなたの言葉に貸す耳、ない。

朝倉　さは宣へど某とて、決して恥を與やうなどと存じ寄せてには候はず、御臺所の御座ある事を包み申せしは某が誤ちなり、さりながら御語合ありし其上は、恐れながら二の君の御側女とも……

天秀　側女とな……無禮なり左衛門、御祖父君は太閤殿下、父は正二位右大臣、當將軍には正しき姪ぞ、口をしや、世が世にあらば己等と、言葉を交はす自らかや、汚らはしい側女よばはり、奇怪なるぞよ。

立上りながら云ひ、終に泣伏す。

朝倉　ささ御憤りは然る事ながら、時世の習と御絶念然るべし、蜀の劉備は庵を織り、また我が朝の光明皇后は非人の身體を清めたまふ……

天秀　云ふな、云ふな、かく侮づられ、恥しめられ、汚らはしき側女……世も覆へれ、身も亡びよ、天も地も失せよかし。(スックと立つて)情なや。

衣を頭より冠りて伏す。

朝倉　今は申すも詮なき事、深き御思案願ひ奉る。

朝倉下場。

歌　花暖風に開けても、同じく暮春の風に散る。心も戀の春風に、誘はれて咲く仇花の、散るを詠むる人心、消ゆるを待つかうらめしや。

歌　もとより我は人間の、列を外れし身なりしが、思はぬ戀に浮草の、寄邊を放れ流れ行く、水面に描く花鳥の、あとを止めぬも憐なり。

歌　捨てられて、何處に歸るかりがねの、宿は越路か羨ましし、雁は連をば亂さねど、妾は獨はづかし。

歌　戀の火の、戀の火の、ほむらは消えて、焚き添ゆる執着の念、嗔恚の炎。

歌　あら恨めしや、恨めしや、今は打たでは叶はじと、櫻の枝を手にとりて、中有を拂つてりう〳〵はつし、蔓も瓣もばらばらと、散るや嵐の花吹雪、うはなり打の振舞は、おそろし、すごし、あさましき。

秀姫上衣を脱ぎて櫻の枝を持ち、打振れば花落ちて撞木の形となる。段々と急に舞ひ、歌の終りに幕に詰めよる。中より山伏壹人出て祈る。天秀の秀姫後へヂリ〳〵と下り、上手に行くを、山伏靜に追ふ。下手幕の詰際にまた一人の山伏出でて祈るにより、面を背けて後へ下り、舞臺中央に立つ。

山伏一　東方に降三世。

歌　明王。

山伏二　西方に大威德。

明王、南方軍荼利夜叉明王、北方金剛夜叉明王。

天秀　中央不動。

歌　明王のさつくの繩に掛けられて、あらあら恐し般若の御聲。

歌　聽我說者、得大智慧知我心者、即心成佛と祈り祈られくる〳〵〳〵と足もとは漂ひ弱めく片輪車の旋りかねたる苦しさよ。

秀姫祈り伏せられて眞中に瞠と坐す。山伏左右より數珠にて背を打つ。舞臺一變して以前の居間となる。御簾は下り居る。

歌　おぼろ夜の、ふけ行く時をかう〳〵と敎ふる鐘もしづかなり。

簾を揚ぐれば、天秀以前の尼姿、經机に依りて眠り居る。

天秀　夢なりしよな、夢は五臓の疲れと云へど、心にあらぬ妄想の、戀路に迷ひし耻かしさ、もと六欲を脱せし比丘尼の夢ならば、寂光の寶土などこそ然るべきに、五塵に垢づき色界の街に迷ひしあさましさよ、生死涅槃は一旦の夢幻は空なる華の理りと、遍き一切の女人に教化する身にて、うはなり打の振舞まで、まざ〳〵夢みし不覺さや、南無佛、この迷ひをば晴らさせたまへ、げにや浮世は一睡の、夢中の道をたどる愚かさ、消えぬを消さむと勉むれば、反りて駒は櫻に狂へ、鶴は白けれ、松は青けれ、南無三寶(机を叩く女童來る)皆を呼びませ。

女童去る。一露尼を始め、以前の尼等出で來る。

天秀　本尊に祈る事の候、御袈裟是へ。

袈裟を着して立つ。微かに音樂聞ゆ。

(幕)

底倉湯

一、箱根底倉山中

二、木賀彦六太夫宅

(應永十一年春の事)

登場人物

新田相模守義隆		二十七八歳
世良田七郎時國	(新田の臣)	
木賀彦六太夫	(湯の宿)	十六七歳
娘　渚		
浴客　太郎又		

同　次郎作
捕手の武士大勢

一　箱根底倉山中

山中の平野、若艸萠え出でて綠の春なり。山櫻匂ひ。遠山霞む。入浴せる近在の農夫太郎又次郎作物語りつつ登場。

太郎　されば次郎作の御云やる通り、どうやら怪しい人ぢやわい。

次郎　こちらあたりに見馴れぬ容態、世を忍ぶ侍でがなあらうぞ。

太郎　世を忍ぶのは我慢もなるが、人目を忍ぶ戀の道、風呂の中でも話て持切る、名物の渚女郎を手に入れられてしまふたには、羨ましいので腹が立つわい。

次郎　誰れが手に入れやうと、己れの面て心に掛ける事があらうはいいい。

旅裝したる世良田七郎時國登場。

七郎　なう〳〵物を問ひ申す。

太郎　何でおじやる。

七郎　箱根木賀の湯宿、彦六太夫と申すは何方でおりやるぞ。

太郎　彦六太夫は我等が宿のつい隣家でおりやる。

次郎　折よい歸り道ぢや、お尋ねなさらうなら御供を致さう。

七郎　さらば案内を頼み申す。

三人下場。新田相模守義隆、木賀彦六太夫の娘渚と共に草山の中より來る。

義隆　渚、向ひを御見やれ、毎日眺むる景色なれど、けふは殊更美しいわい。

渚　遠山の端に霞みたなびき、空はうらゝに候へど、風冷かの春淺。

義隆　亂れたる世も山中は、音なうものは峰の猿、時の移るも知らずに過ごすわ。

渚　暦に事欠く山住も、あれ櫻の咲くに、づい春を知りましだ。

渚寄り添ふ。

義隆　心ゆく奴、見い、谷間を流るる早川の、たとへ淵瀬が變はらうとて、我れと其方とは變るまじいぞ。

渚　ても有難きおん言葉、谷を隔てて明神の、御嶽はよしや壞れても、他し心は持ち侍らはじ。

義隆櫻の花を取る。手の屈かぬに延び上り、腰の古疵少しく痛む。渚走り寄りて抱く。義隆は櫻花を渚の頭髪に挿す。

義隆　柳の枝に花が咲いたわ。

渚頭に手を當て嫣然、急がはしく地に咲ける菫を取りて束ね、

渚　香は薄けれども菫の花束。

義隆　獨り居の思ひ出とよ。

菫を受けて義隆笑む。渚手拭を巖上に布き、義隆に座を薦め、其傍に踞す。折から番の蝶飛び來りて翩翻たり。よき程に以前の世良田七郎登場。

七郎　若君。

義隆　……

七郎　それなる女性は。

義隆　木賀彦六太夫の娘ぞ。

七郎（少しく考へ）なに彦六太夫の娘とな、幸ひ〳〵、拙者唯今御部屋に燧袋を忘れ申した、太儀ながら取て來ては下されまいか。

渚　はい、あの燧袋を。

七郎　障子の傍へ忘れ申した。

渚　畏りました。

渚下場。

義隆　七郎、燧袋が何の用ぞ。

七郎　いや他聞を憚る御身の上、忘れも致さぬ燧袋を取らせには遣りまいた。

義隆　旅装の其儘にて、出先を追て参りしは、火急の用事と推察致す。

七郎　されば候、過ぐる年、信州大河原にて敵に襲はれ、綴きて陸奥のおん住居も、水鳥の下安からぬ有様にて、この箱根には潜みたまふ、然るに某、當所に参る道すがら、底倉の温泉に怪しき人ありとの風説、いま新田殿の御一門に於て、總大將と仰がん御方は君の外に候はず、重きが上に重き御身、一刻も早く御座を變へさせたまはずは、禍不測に起り申さん、疾く〳〵御用意然るべしと存じ候。

義隆　口善惡なき雑談を聞けば、我が首を五十枚の黄金にて購はんずる由、矢疵に斃める義隆なれば、首は惜しく思はねど、君の御恨み、一門の憤りを晴らさぬまては中々惜しき命なり。

七郎　かの武藏なる秩父の里は、また山深き僻土にて、世を忍ぶに便り好し、一先御開きあつて、彼處へ御動座然るべし。

義隆　行歩思の儘、ならねど、近頃大きに怠りたれば、両三日を過ぎたる上は：

……。

七郎　こは御言葉とも覺えず、落つるには時をも限れ、二日三日の猶豫や候ふ、いかに若君、春あらば花は開き候ふべし、一門の仇は重く候へ。

義隆　云ふな〳〵、出立は明朝ぞ。

持ちたる蓙を地に抛つ。

七郎　無禮の言葉、お叱りも無く有難し、人目もあれば某は直ちに途中へ罷り

越え、御動座を待ち申さん。

義隆　さらばよ時國。

七郎　明日は早朝御迎に參り候ふべし。

七郎下場。義隆沈思の態渚いそ〳〵と來り、

渚　旅の御方は何れへ御越しなされました、もし燧袋は見えませぬぞえ、見えずとも苦しうはござらぬかや。

義隆　旅人は立歸つた。麁漏な男、袋は身に付け居つたよ。

義隆寂しく笑ふ、渚は捨てたる花束に目を付け、

渚　やや、花束が捨ててある……山の峽より湧き立つ雲と、男心はかうしたものか。

渚磐を放ちて泣く。義隆雲の姿に心を留め、

義隆　煙の如く、島の如く、或は南海の鯨の如く、又は矛持つ鬼神の如し、須臾に生じ刹那に變ず、我が一生は雲の繪卷物、知らず何れより出でて何處へか歸る、ああ定めなの世や。

渚　根を放れたる紫の萎れた花は色まだ濃きに、心變はりし源氏菫。

義隆　や、

渚　新田家の若殿樣と、土ほぜりの賤しい女……

義隆渚を取つて引寄せ、

義隆　いかにして新田なんどと、

渚　その驚きが正しき驗、

義隆　何といふぞ。

渚　先程宿へ歸りし所、父の申し候は、離れ座敷の客人こそ、新田相摸守義隆殿にて渡らせたまへば、心を付けて侍き申せ、今日にも改めて見參に入り參らせ候はんと懇の物語、牡丹の枝に薊は咲かぬに、賤しき此身の暫なり

とて、馴れしは宿世の果報ならん。

義隆　なに果報とや一夜の情に唯一つの操を奪はれしが果報とや。

渚　世が世にあらば御傍にさへ、得寄る事も叶ひませぬ。

義隆　たとへ下賤の育ちなりとも、女人の寶は情を以て一となす、此程よりの優しき擧動、いかにかして忘るべき、東に走り西に驅けり、ひまなく人に遇ひたれど、唯一つの誠をもて、我に盡くせし女は一人、正しき妻は汝なるぞ。

渚　猿の醸せし酒よりも、いと甘き御言葉、さはいへこの花束は。

義隆　世上の義理に暫くは地へ還した汝の面を見るも此花のまた咲く頃ぞ、

渚　すりや御痛み所も癒らぬうちに、

義隆　明けなば此身を隠すなれ、年變はりなば迎へんに、心變りをしたまふな。

渚　女の思は蛇の執念くは候ふぞ、たとへ三年が五年なりとも、屹度お待を致しまする。頭上の花を取り君の手づから翳し給ひし、この花は暫の形見。

義隆　出立の後までは父を始め誰人にも、他言ばし致すまいぞ。

渚　あい。

二人立ち手を組みて歩む。折から山風して花を吹き散らす。渚義隆に縋る。

義隆　果も結ばぬ花櫻の、何とて散るを急ぐらむ、散る花の行方を見る渚は以前の櫻を口の邊にあてて笑む。

（幕）

二

木賀彦六太夫宅

木賀彦六太夫の宅の一部、庭を前にしたる離れ座敷、山櫻の下、覓の水縁の前を流れたり。彦六太夫捕手の頭人をつれて上場。

彦六　あれが一物の座敷でおじやります。

頭人　さては新田義隆の……

彦六　大きな聲を爲されまするな、束の間に風呂から歸つて來られませう、柔しう見えても手強い大將、いつも夜分は定まつて笛を吹かれまする、其音を合圖に庭先へお忍びなされ、折の能い頃、私が太刀を奪取り投げ出しませう。

頭人　何さま打物さへ無くば恐ろしい事もあるまい、さらば笛の音を合圖に、此座敷を取圍まう。

捕手の頭人下場。

彦六　けふ尋ねて來た武士に、連れ出されては籠の鳥を、空へ飛ばすも同然、眞事しやかに娘へ話し、新田殿へ奉公と云はせる樣に仕向けたのも、五十枚の黄金を逃さぬ用心、したが怪しい娘の素振、物になつては一大事、旁た怪

我の無い樣に、宮城野の叔母が病氣とこしらへて、今夜は家へ置かぬが分別ぢや。

義隆　渚と共に上場。

渚　爺さん何してぢや。

彦六　おゝ娘戻つたか、御客樣お歸りにござりまするか。

義隆　只今歸つた。

義隆、渚、彦六座敷に入る。

彦六　外と違つて座敷の中は昏い事ぢや、これ渚燈火を早う。

渚　あい。

渚下場。

彦六　お客樣、御痛み所は如何にござりまするな。

義隆　溫泉の奇特、日に增し快く覺ゆるぞ、さりながら執念き傷ぢや、未だに痛

み居るわい。

彦六　あのまだ痛み……左様にござりまするか、

渚、燈火を持ち來る。

彦六　これ渚よ、宮城野の叔母様が俄かに病氣ぢやとよ、太儀ながら今から行つて來て給もるまいか。

渚　あい、あの今から……。

彦六　おい、暮れぬうちに早う行けよ、そしての、今夜は泊つて來るがよい。

渚　いえ、あの妾は戻つて參りまする。

彦六　泊つて來いよ。

渚　それても……。

彦六　はて歸るなよ。

渚　遲くなつても戻つて來まする。

渚、義隆に一禮して下場。彦六は遙かに下つて平伏す。

義隆　こは主には何としたぞ。

彦六立つて左右を見廻したる後、

彦六　此間中より申上うとは存じたなれども、世を忍ぶ御身の上、人目を憚り無禮の段は御免下され、世が世にあらば、かかる汚せき鄙の家居に御起伏をなされうか、緣あればこそ彦六が、住居を假の御座所、冥加にあまる仕合せと存じまする。

義隆　何といふぞ。

彦六　お隱しなされまするな、人目を忍ぶ客人は新田の若殿、

義隆　こは思ひ寄らぬ言葉なり。

彦六　草木に心を置かれますれば、何處までもお包みなさるは御道理、はれや新田の若殿と承はつては同席も恐れ、御名乘下されぬのも反つて御情、

年寄の性急によしない事を申上ました。

彦六立つ。

義隆　待たれよ主思ひ寄らぬ今の疑ひ、新田は當代の怨敵、左樣の事を云ひ觸らされては近頃迷惑致すぞ。

彦六　なにがさて他言など致す事でござりませう、他言致す心底なら、此方樣に申上やう筈がござらぬ。

彦六下場。義隆立て佩刀を取り拔き試む。肘少しく痛む氣色なり。刀を收めて坐して沈思の風。彦六酒肴を携へて上場。

彦六　心ばかりの饗應風、一献召上り下され。

酒を薦む。遠くに鹿の聲聞こゆ。

義隆　二十日下りの春の宵、月まだ上らぬ闇の中より、遠に聞こゆるは鹿の聲な。

彦六　春先は殊の外に鳴きまする。

義隆　妻戀ひわたる小男鹿の、鳴く音を聞けば腸を斷つにも似たる思ひかな、我れも好める笛を奏で、小鹿と共に鳴き明かさう。

彦六　すりや、あの笛を遊ばすとか、それは何よりてござります。

義隆　亭主にはあまり好かぬと聞いたが……

彦六　いや、なに、その、好きてはござらぬが、好物ておじやります。

義隆　何を申すぞ、はゝゝゝ。

義隆立つて筧の水にて歌口を濕めし、笛を吹く。彦六膝行して次第に近づく。義隆感に入つて益す笛にすさむ。此内に捕手忍び寄る。彦六伺ひよつて、義隆の太刀を庭先へ投ぐ。捕手拾ひ去る。

義隆　無禮者。

彦六を引き据ゑる。左右より捕人等切つてかかる。月出づ。義隆彦六

を突き遣り、小刀にて奮闘、二三人を斃したれども、痛み所の爲めに遂に數創を負ひて斃る。頭人は義隆の首を掻き袖を切つて包み、義隆の太刀を捕手の一人に持たせ、傍らに踞せる彦六を見て、

頭人　彦六、此由を鎌倉へ申上げ、追て褒美の沙汰に及ぶぞ。

捕手の頭人始め一同下場。

彦六　恐ろしい事であつた、五十枚の黄金で三人四人、生命の相場は高いか廉いか分らぬ者ぢや。

慌だしく驅け來れる渚上場。義隆の死骸を見て縋りつきて慟哭す。

彦六　娘、忌はしい死骸に近寄るな、此方へ來い。

渚　なんぢや忌はしい、忌はしい筈、こんな姿に爲られたもの。

彦六　出世前の若い者が、近寄らぬものぢや。

渚　出世！出世！土百姓の娘と新田の若殿樣、死骸でも大事ない。

彦六　分らぬ事を云ふ奴ぢや、新田でも、若殿でも、天下の敵ぢや。

渚　敵ぢやとへ、あ、さては父さん、貴方が訴人なされたな。

彦六　いや、己れやせぬわい。

渚　いや、した、した、叔母さんの病氣だなどと私を誑した。

彦六　よしや訴人をしたと云ふて、われが怒る事はあるまい。

世良田七郎上場。親子の爭ひを立聞く。

渚　あるも無いもあるものかいな私の爲めには大事の夫ぢや、さァ夫を返せ、返して下され。

彦六　なに夫ぢや、親の許さぬ語合はどうしてした。

渚　何と云つても私の夫ぢや。

彦六　若い男に有勝ちな、一時の仇花ぢや。

渚　未來まで云替はした若殿樣、父さんお前慾の爲めに、娘の夫を殺したな、

さア殺さんせ、私も殺して下され、冥途へ行つてお詫をする。

彦六　老先き短いこの私ぢや、褒美の金も、みんなおのれに遣らう許りじや。

渚　金なんぞ、金！　金！　金で夫が買へやうか、あんまりな父さん。

世良田七郎、彦六の傍に來りて突立つ

彦六　や、最前の侍。

逃げんとするを七郎一刀に切下げる。

渚　こりや父さんを何んで切らさんした。

七郎　厄體漢め、汝の爲めに若殿は、大事の御身を損こねたわ。

渚　なに私の爲めとは。

七郎　されば畫の頃、御動座を勸め參らせしも、汝と名殘を惜まれて、唯一日を延ばせし故に、斯樣の大事とはなりたるぞ、ああ云へばとて歸らぬ事、唯一筋の血統も、絶えたる上は七郎が、年來の大望たる新田再興の夢も醒めたり。

渚　戀も果てたわ。

七郎　今は弓矢も何の爲めぞ。

七郎太刀を解きて義隆の死骸に供へ、痛憤頭を押へ一禮して驅け去る。渚茫然として七郎の去るを見たるが、情激して紅涙雨の如し。

渚　父さんは死んだ、欲は死んだ、戀は死なぬわ、義隆樣、若殿樣、何にを笑はせらるるぞ、憎らしい殿！

走り寄りて櫻の枝に縋る。花散つて雪の如し

（幕）

日蓮雨乞

相州極樂寺門前

（文永八年七月三日の事

登場人物

下山兵庫助光基　凡五十歳
四條金吾頼基（北條一門江馬守の臣）　凡二十五六歳
同妻　芙蓉（下山兵庫娘）　凡二十歳
鎌倉の人　四人
雨乞の百姓六七人
通行の老若　數名

日進法師（日蓮聖人の弟子）

山門の前に小さき石橋あり、傍らに『當六月十八日、孔雀王經修行、靈鷲山』といふ高札を立てたり。長き早魃に緑の所々赤くなりたる松一二本、その下の捨石に男二人腰を下して語り合ふ。

男甲　暑い事ぢや、この汗は瀑の樣ぢやわい。

男乙　なにとて雨は降らぬのか、此後二三日も降らぬに於ては、世界の生類は絶えてあろ。

甲　いかな事にも恐れぬが、早にはほとほと弱る、鎌倉中の井戸といふ井戸は乾上つて、飲水に事を缺くほど難義はござらぬ、かういふ中にも舌が粘つて、物いふにも太儀ておじやる。

乙　世が惡うなつた爲めぢや、極樂寺の生佛樣が祈つて御坐つても降らぬ雨ぢや、二七日の修行でも詮がないと申すは、此世が破滅するのではあるまいか。

上手よりまた二人出來る。甲を見て、

丙　太郎又か、何れへおりやるぞ。

甲　三郎吾よ、腰越へ行つた歸り路ぢや、いや大旱てな、腰越中の井戸は水切れぢや、畠は黄ばむ、田は赤うなる、毎日々々雨乞の祈禱ばかり。

乙　前代未聞の大旱、春から今に一と滴も落ちぬとは珍らしい事ぢや。

丙　されば、是は唯事ではあるまいぞよ、此頃小町の辻で、日蓮坊の説法を聞いたがの、法華經を用ゐぬ爲めの災難ぢやといふわい。

乙　何ぢや知らぬが、生佛と評判の極樂寺樣が、二七日の御修法でも降らぬ雨、神の力も佛の力も頼まれぬ世ぢや。

丙　いや〳〵その法華經を用ゐれば、直ぐにも雨は降るとの事ぢや、良觀樣の力に及ばずば、これから祈つて法華經の功德を見せうとあつて、今しが

た庵室を立出てさせられた程に、身共も後から樣子を見に行かうと存ずる。

丁　和御郎達も在せられぬか、祈りの場所は田邊の池ぢや。

甲　雨乞の御祈禱も、此お寺のを度々見たが、蒸暑いのに當惑した。

乙　まして日蓮坊の祈禱などを、田邊の池まで見に行くとは愚しい事ぢや、人を誘ふよりも、おこと止めたがようおざらう。

丙　身共も降るまいとは思ふが、良觀上人樣の大修行を拜んだから、日蓮坊のも後學の爲めに見て置かうと思ふのぢや。

丁　もし又雨か降らなんだら、存分云うて遣らうと思ふので、な同心して參つたのぢや。

乙　左樣か、さういふ其方の了簡なら、日頃から禪宗を惡口する日蓮坊の雨祈り見物に參らうぞ。

甲　さらば某も參らう。

四人下手に入る。すれ違ひて四條金吾頼基、背に文を負ひて登場。上手よりは日進法師傘三本を負ひて來る。

日進　殿か。

金吾　御坊か。

日進　殿は何れより御坐りましたぞ。

金吾　田邊の池より御文使に極樂寺へ參る所ぞ、して御坊には何とて遲なはりたまへるぞ、急がせられずば御經の始まり申さむ。

日進　拙僧は御留守居を仰付けられましたなれど、御傘を忘れさせられた程に、屆け申しに參りまする。

金吾　まことや今日の雨乞に、傘を持たぬは感應を疑ふ道理に責められたり、衆生の爲、法の爲、尊き御身を濕らしますな、日進殿よう心が付かれたぞ。

日進　左樣なれば四條の殿。

金吾　心を付けて行かれい。

日進下場。

金吾　金を蕩す早魃に、さしもに綠潔よき松の葉も赤みさし、此世は末期に近き有樣、げに上人の宣ふごとく、大法を輕んぜし祟りとは今ぞ知んぬる、さりながら佛の御慈悲、末法の世も聖人出でて、衆生を救ひたまふなるに、嘲み嫉める男女僧俗、痛はしき世の中よな。時移らぬ間に此消息を。

金吾門内へ入る。雨乞の百姓達太鼓を叩きつゝ登場。

百姓一同　さア御坐れ〳〵。

寺の門前に來り一同止る。

百姓一　何と皆の衆よう聞かしませ、此中より極樂寺樣が雨乞の御祈禱をさつしやるが、未だに雨が降らぬ、一七日の御修行が、二七日に延びたれど、喃、雨はおろか霧さへ下りはせぬ。

同二　小町の辻で日蓮坊の說法を聞いたがの、是はひとへに法華經を、用ゐぬ爲の天變ぢやと云ひ居つた、其證據には生佛と噂の高い良觀樣が祈つても、雨の降らぬが定ぢやと云ふげな。

同三　植付けた苗は赤うなる、田甫は龜の脊の樣に乾破れ、灰のやうに白うなつて、鮒や鯰が死んでおじやるわ。

同四　何んても是は唯事ではおじやるまい、それとも日蓮坊の申す樣に、法華經とやらの祟りであらうか、法華でも眞言でも、雨が無ければ何としやうぞ。

同一　お見やれ此札の表を、六月の十八日から御修行は怠られぬが、大風は間なく吹いても、雨の氣は微塵も無い、役僧に御目に掛つて、其譯を聞かうではあるまいか。

同二　雨が降らねば生佛でも何んでもない。

同一　其仔細を問ひませう。

同二　それがよからう、さア〳〵御坐れ〳〵。

百姓達門内に入らむとす。上手より下山兵庫助光基、念珠を手首にかけて、杖を持ちて登場。

下山　待て〳〵、尾籠なる姿にて何れへ參るぞ、唯今あれにて承はるに、雨乞の事を質さうての、推參なる汝等かな、相州殿さへ歸依なしたまへる尊き上人の行法を、汝等の分にて兎角の談合、降らぬ雨は降らぬまでよ、御法の力に及ばぬを、推して面談なんどと奇怪々々、宿所へ歸りて控へ居らう。

百姓共段々に後へ下り、一人宛次第に下手へ逃れ去る。

下山　いかに禮儀を知らねばとて、天下の高僧へ無禮の云分、さりとは下智の奴原かな、はゝゝゝゝゝ、なき奥の忌日といふに、思はぬ事に嗔恚の炎あさましゝ、南無阿彌陀佛々々々々々々々、御寺に詣でゝ後世を祈らむ。

金吾の妻芙蓉登場今や門内に入らむとする兵庫助を見て、走り來りて袖をとらへ。

芙蓉　待たしませ。

下山　何事ぞ、や、芙蓉か。

芙蓉　暫く御待ち下さりませ。

下山　勘當の娘、用はおじやらぬ。

芙蓉　御勘當を蒙りたれば、子て子にあらぬ妾なれど、母、樣の御命日とて、御墓に詣でし歸るさに、御目に掛るも深き緣。

下山　親子は一世と聞くなれば、此世ばかりの契なるに、邪法を信じて彌陀を蔑なす、その心根の憎ければ、思ひ切つて勘當せしが、母、の忌日に我を止めたは、忌はしい題目とやらむを捨うとか。

芙蓉　これはまた情なき御言葉、亡き母、上の御忌日に、御顔を拜みしは、正法のまだ父、上を捨てさせたまはぬ詮ありと、喜び勇みて止め參らせしも、誠の法を薦めむ爲め。

下山　云ふな女、その性根の癒らぬうちは、言葉を変すも疎ましい、たまたま親の忌日に逢へば、はや念佛を蔑なす仇口、汝が申す法門とて、元は同じく釋迦牟尼佛の經文より出でしにあらずや、もと是れ一つの佛法に、上下の隔てのあるべきぞ。

芙蓉　隔てのあれば申すになむ、一つ枝に咲くとても、實を結ばぬは仇花ぞや。

下山　まこと念佛は無間に墮つと云ふからは、我れの未來も然りと申すか。

芙蓉　なかなかの事。

下山　さては御身の母、刀自も、無間の底に沈めるとか。

芙蓉　恐ろしさに物な宣ひそ、正しく母、上も、惡業の報いを受けさせ給ふならむ、その悲しさに父、上にも、かくは御勸め申すものを、など迷ひをば去り給はぬ、御心強きにも程こそあれ。

下山　無禮者め、胎内を苦しめたる大恩の母、をさして、地獄に墮ちてありなんどとは、如何なる天魔の惡口ぞや、日月天にかがやくに、かかる不思議を見ることよ、父は勘當なしたれば、餓鬼地獄とも謗らば謗れ、死したる母に惡名を蒙らするとは何事ぞ、不孝者とも人外とも、云はむ方なき憎き女、他人の父の腕の力、骨身に確と思ひ知れ。

持ちたる杖にて芙蓉を打つ。

芙蓉　打たれても親の杖、まいてや是は法の爲、あら有難や、南無妙法蓮華經、々々々々々々。

下山　呆れて、

下山　狂氣し居つたか、佛に提婆、太子に守屋、情なき極重惡人、一念即滅無量罪、

南無阿彌陀佛々々々々々々。

と又門内へ入らむとす。中より以前の金吾頼基出づ。

金吾　珍らしや兵庫助殿、何れへの御出ぞや、それに居るは女房ならずや、途中にての御物語、扨は御勘當御免ありたるか、いかに、いかに。

芙蓉涙にくれて答へず。

下山　免しはせぬ、未來永々、改めて盡々劫までの勘當ぢや、さりながらお身此寺より出で來しは訝かし、法華とやら、題目とやらむを捨てさせられたか、恐らく足踏もせまい極樂寺へ、參詣は何の爲ぞ。

金吾　御不審は御尤けふ此寺へ來りしは、別の仔細候はず、日蓮御坊の御消息を、良觀坊へ達せむ爲め、文使ひに罷りしなれ。

下山　はゝゝゝゝ、執權殿の御一門、江馬遠州の家臣として、世捨人の早打飛脚、さぞ譽ある擧動さうな。

金吾　往昔聖武皇帝は、萬乘の天子にして、三寶の奴と稱したまふ、況んや金吾此世にありて、末法の大導師が、文使ひこそ身に餘れ、正しき法の爲には、臂を斷ち指を燃す、いかなる業とて恥ならじ。

下山　口賢うは申されたれど、吾佛のみ尊しと申す世の諺を知らざるか、如來素より僞りなし、僞りなき故に佛といふ、その佛の說かせたまひし、念佛眞言禪律諸宗を、無得道なりと云はむには、大聖世尊の經々も妄語となり、また一切經も白紙同然、自力他力の別はありとも、終には登る高根の空、異なる麓に執着するは、狂氣の沙汰に近く候。

金吾　されば、塔を建てむにはまづ足代を組む、これを方便といふ、大塔全く成就せば、足代は毀ちて捨つるなり。これを眞實といふ、大聖世尊法華經の、大寶塔を造立の爲め、四十餘年の其間、念佛禪等諸經の足代を說かせたまふ、今これを切り棄つるを正直捨方便とは申すなり。

下山　御邊の法談道理あるには似たれども、唯一經一所の文にあて、舌を弄する法華の自讃、まことと法華が眞實なるか、乃至念佛が眞實なるか、凡夫の我等が無智の身として分別無用、唯ひたすらに念ずる時は、往生成佛疑ひなき彌陀の悲願ぞ慕はしけれ。

金吾　いかに下山殿は覺し召すぞ、國に正法絶えたれば、天神地祇も怒を爲し、數の天變怪しき事ども、皆是れ法華經を用ゐぬ爲なりと、日蓮御師のおん仰せ、是れをいかにと覺し召す。

下山　天變地異は時の禍、唯因果の致す處、厭離の穢土に思ひは殘さじ。

金吾　さらば何とて此寺の、良觀坊は二七日まで、嚴めしく高札を打ち、諸天に雨を祈りたるぞ。

下山　や。

金吾　孔雀王經の大修行、二百有餘人の伴僧を隨從なさせ、壇に五色の糸を引き、芥子袋をひけらかし、丹誠を擂んでて、修行を爲させたりしは、何故ぞ、其法無くば何をか祈らむ、法ありて雨無きは、單に眞實ならざる故なり。

下山　人の及ばぬ業なれば、雨無しとても責められまじ。

金吾　いや然は云はれじ、永き修法の其間も、風恐ろしく砂舞ひ、二六時中に止む事なし、剩へ二七日まで一雨も下らず、昔和泉式部といへる好色の婬婦、能因と申せし無戒の法師さへ、歌を讀みては雨を下しぬ、いかに此寺の、良觀房は執權の御一門、上下擧りて歸依の名僧、その祈りにて叶はぬとは、便りとなせる法に僞りある爲なり、是を以ても邪法を知るべし。

下山　さらば御身の崇める日蓮とやらむの法力が雨を降らすと申さるるか。

金吾　されば只今の御文は、既に二七日の間使三度に餘り候、いまに一雨も無きはいかに、一切衆生の爲、只今より日蓮田邊の池に赴きて雨乞を仕るべし、已刻ばかりより雨降らば、邪見を翻へし速かに我が弟子とならせたま

ふべしとの消息なり、此義を執し申さむ爲め、此寺へは參りたれ。

下山　辰も下りて間も無き巳の刻、(空を仰ぎて)空に張太る日和雲雨の氣は微塵無いわい、お身の崇める法華殿の行力こそ知られたれ。

芙蓉　蔭なき眞夏の暑さにて、肌背は汗染めど、雨にあらぬをいかにせむ。

金吾　(日を仰ぎつゝ)はや讀經の御時刻と覺ゆるに、拭ふが如き青空は、一點の雲も無し、さはれ大聖のおん譬、などか空しくなりたまはむ、南無妙法蓮華經々々々々々々々々。

下山　はゝゝゝ、いかにぞ金吾、二七日の孔雀王經も叶ひ難き難義の雨乞、一時の法華經にては叶ふとか、和泉式部や能因にも同じく劣れる日蓮坊、かくても餘人を謗るぢやまで。

金吾　(呻吟しながら)巳の刻も近かるに、心にかかる有樣かな。

芙蓉　まことに雨の降らぬときは、御經流布の障りとならむ。

金吾　龍神感應ましまさぬか。

芙蓉　惡鬼法を推沮むか。

金吾　あさましき、

二人　空のけしきや。

下山　金吾も芙蓉も聞かれい、人を謗るを以て能となせる日蓮法師が、日頃の廣言をこれにて悟り候へ、上を罵り下を嘲けり、人も無げなる辻說法、良觀上人と雨を爭ひ、時を限りて降らすと云ふに、この青空は何事ぞや。

大雷聞ゆ。

不山　や、遽かにはためく雷鳴の、老の耳を貫くよ。

金吾　南の方に黑雲の笠に似たるが出でたるは、

芙蓉　あれ〳〵見る間に推し擴がり、

金吾　小山の如くに成りたるよ。

茨蕊　うばたま雲や薄墨の、

金吾　雲のちぎれの間より、

下山　下界を射れる稲妻の、

茨蕊　光に晝を覺ゆるばかり。

金吾　龍の都を立ち出でし、八大龍王八大龍女、いまや御幸の雲の上。

下山　浪を蹴立てて空に入り、渡り來れる御氣配。

茨蕊　その滴かや甘露の玉、

下山　烏帽子を濕し手を濕す。

金吾　乾ける大地は聲無くして、雨を飲み行く法の惠み。

下山　その喜びの聲かそも、勇ましげなる雷の、虛空に躍る由々しさよ。

上下より雨に遭ひたる男女、驅け來りて門の軒先に集ふ。雨に濡れて外に立てる三人を見て、怪しみ耳語するもの、指さし笑へるもの

あり、日進傘をさし、裸足にて足の中程を藁にて結びたり。

日進　殿か、奥方もわたらせられましたか、今こそ傘が用に立つた、さらば是を參らせう。

己れの傘を出して金吾に薦む。

金吾　いいや濡るるとも法の雨。

下山　今こそ思ひ知られたれ、烏帽子も掛緒も、直垂も、濡れよ〳〵身の骨まで、法華の利益に濕さうよ。

茨蕊　そも此程の御勤氣は、

下山　おゝ、念佛の數珠と共に。

數珠を大地に抛つ。雷光しきりなり。大雨、大雷。

金吾　あら有難や。

各合掌して雨中の空を拜す。門前なる群衆先程よりは人數を增せ

七つ桔梗

しが、笑ふもの、訝かるもの、瞠目するもの多し。

（幕）

桶峽間

清洲城内奥殿

（永祿三年五月十八日夜）

登場人名

織田上總介平信長　二十七歳

林佐渡守通勝　凡四十歳位

柴田權六勝家　同三十一歳

簗田出羽守政綱　同三十六七歳

森三左衛門尉可成　同三十歳位

おさいの方（信長の妻）

桶峽間

侍女　二人
小姓　四人
家來　大勢

清洲城内能舞臺に續ける一室にて、舞の折は樂屋に兼用の體なり。上手に幕を掛けたるは橋掛りへの出口なり。踏段に石ありて庭に出づるを得。腰元二人立掛り居て、

侍女一　なんと忙しなや、忙しなや、とんと身體は粉になる樣ぢや。

同二　俄かの御酒宴の其後に、又もや舞を舞はしやるげな。

同一　聞けば御表では軍評定、殿樣御出陣との事ながら、御奥では舞の催し、どうした事でおぢやらうの。

同二　大敵の今川を前にして、防ぎ矢の手配などをも遊ばされず、御囃子を呼び出いて、又『敦盛』なと始まるぢやまて。

林佐渡守通勝登場。庭先に立ちて、

林　侍女衆、急刻御目通仕りたうおざつて出仕致いた趣きをお傳へ下され。

侍女一　畏りました。

侍女立ちて行かむとするを、向ふより、

柴田　暫く。

と聲を掛け、柴田權六勝家登場。

柴田　御披露の序に、權六勝家も至急御見參に入りたき旨仰せ下され。

侍女二　畏りました。

侍女二人立ちて行く。二人の武士は床几に腰を掛け、

林　無作法者の勝家拙者の披露が相濟んでの上、御取次を賴まれたが可からう。

柴田　いいや左にあらず、御身の如き腰弱の生溫い取次とは事變り、勝家が意

見は刻を爭ふ、隣家が燒け居る場合には、唐木づくめのあたら座敷も、溝の流れを注ぐ道理ぢや。

林　呼いたりな勝家、己れを知り人を知るが兵法の奥儀、唯聊かの武勇に慢じ、漫りに境を出づるが如きは、心ある大將の爲さざる處。

柴田　その講釋聞きたうおざらぬ、評定席での御身の說法、長々しいのに耳が痛み、未だに耳瘤が愈え申さぬ。

林　さほど心魂に徹されたら、軍の道理も大凡承知が出來なされたらう、明日出陣と決定は相成つたが、小城の奪合攻合とは樣變つたる大事の場合、今一應の諫言を勸め申しに參りしが、見れば此場の有樣は。

柴田　おゝ、明早朝の出陣と、甚の評議に承はりしが、城内あまりのひそめきに、如何はせしと推して參れば、酒宴の後が舞の仕度、呆れて物が申されぬ。

奥より小姓出で來り、

小姓　殿の御出座にござる。

信長太刀持の小姓、おさいの方腰元を從へて登場。

信長　通勝、勝家何事ぢや。

林　御遊興の御中、御耳障りに候へども、今日の軍議は憚りながら千慮の一失、駿遠三の三ヶ國を募り、四萬餘騎の精兵、唯一戰に打破らんとの結搆、さるを味方は漸く僅かに四千の人數、一以て十に當り候に、ひたすら合戰を平場に好むは、甚だ以て然るべからず、抑も此清洲の城は無雙の要害、味方茲に立籠り、防戰時を移し候へば、兎角小荷駄は事缺き勝、旅をかけたる敵の大勢、變を生するを待つならば、勞寡くして功を收めむ、只進むのみが利ありとは一概には申さぬ事、何卒再應の御賢慮然るべく存じ候。

柴田　いいや我君、通勝の意見道理あるには似たれども、抑も兵は常にあらず、正を以て奇を壓し、奇を以て正を襲ふ、虛實の間に味ひを保ち候、一以て十

に當るとは唐土人さへ口ずさむに、日本の武士に能はぬ事や候、その備へあらざるに討つと申すは奇兵の常、一刻も早く推掛けて必死の勇を振ひなば、攻め圍まれたる鷲津丸根の城中よりも打て出て、内外應じて今川勢を打破らんは必定なるべし。

林　たとへ一旦の勝を得るとも、大勢取つて返し、反りて自滅を招くべし、危しとも危きは御身の議論。

柴田　議論は議論、評定ばかりで勝負は付かぬ、大敵と見て恐るゝ勿れぢや、一刻も早く御出馬の程願ひ奉る。

林　何卒御出陣は御見合せ下さる樣、御諚下されたし。

信長　否とよ通勝、古より城を頼みて合戰を爲し、運を開きしものあらず、かつうは世に評定の軍議、今更變更致すべきや、名殘を惜める盃に、今は浮世を忘れ水、今生の思出に、兼て好める幸若舞、さい〳〵衣裳を更へやう。

おさいの方衣桁にかけたる舞の衣裳をとり、信長に着せしむ。此間に近侍文函を持ち遽だしげに登場。

近侍　丸根の城より火急の飛脚に御坐りまする。

信長　使者に休息させよ、文は是へ差置け。

文函を傍に置かせて顧みもせず、衣裳を着くるに餘念無し。

林　丸根よりの文通とか。

柴田　佐久間大學よりの書狀とや。

林　火急とあれば今川勢は、

柴田　早や攻寄せしと覺えたり。

さい　樣子はいかが、氣遣はしや、我君など御披見は爲されませぬ。

信長　開封せしとて何の益ぞ、さい、それよりは『ツレ』の詞を忘れまいぞ。

さい　さりとは餘りのおん言葉。

信長　今になつて文見るとは恐かしい、先手が丸根に寄せた分ぢや、さア囃子を始めさせい、佐渡權六、見物致せ。

さい小姓に囁く。小姓立ちて橋掛りを行く間も無く囃子の音聞ゆ。舞臺靜に廻る。次第に橋掛りより能舞臺を現出す。林、柴田など共に歩みて舞臺の下に坐す。囃子方、地謠、常座にあり。

註、幸若の舞風、詳ならず。故に本曲は能に準じて演ずべし。また地謠は長歌を用ひたる方、現時の歌舞伎劇には相應なるべし。

歌　げにや熊谷は夷なんどと傳へしが、情は深かりける

ぞや、返狀なくては叶はじと御父君は遊ばされ、使にこれを給びければ。

歌　おさいの方使者の若者に扮して、文を懷にし、棹を持ちて登場。

使は文をたまはりて、浪の上行く淡路潟、一の谷に漕ぎ戻る。

使者詞　いかに熊谷殿に申し候、御返事を賜はり八島より歸り申して候。

熊谷に扮したる信長登場。

熊谷　八島の使が戻りたるとや。

さん候。

熊谷舞臺に入り、文を受取り、正面に坐す。

歌　弓矢の冥加なくしては、經盛の御自筆をいかでか拜み申さんと、戴き披いて讀み奉る。

熊谷　盛んなるものの衰ふるは無常の習、さんぬる七日に打ち立ちし以來、燕來つて語らへど其姿を見ず、歸雁音づれ通るといへど聲も無し、天に仰ぎ、地に俯し、感

七つ桔梗

應納受を待つ所に、七日の内にこれを見る、生れ來るに逢ひたるものか、二度姿を見んずること、須彌の頂低うして、蒼海かへつて淺し、萬端事は多しといへど筆紙に盡し難し、武藏の熊谷へ。

かへし狀とぞ讀うだりける。

さる程に熊谷よく〳〵見てあれば、菩提の心ぞ起りける、われも人も長らへて、かかる物憂き目にもまた、直實や逢はすらめ、思へばこの世は常の住家にあらず、草葉に置く白露、水に宿る月よりなほあやし、人間五十年化轉のうちを比ぶれば夢幻の如くなり、一度生を享け滅せぬもののあるべきか。

此舞の中に築田出羽守政綱甲冑にて登場、舞臺の信長を見て畏る。

信長　出羽か。

信長舞を止め。

築田　はッ。

信長　敵の樣子は。

築田　さん候、丸根城へは雲霞の如き大勢、三河の松平を大將にて、唯一押に落さんとて、直直と攻寄せたり、されば防戰手を盡くせども、味方は漸く四百に滿たぬ小勢なり、敵は三千にあまる猛勢、必死の勇は奮へども、落城は束の間なるべく存じ候。

信長　鷲津の城の有樣は。

築田　鷲津へは朝比奈備中寄せて候、此兵凡四千餘騎、玄蕃殿獅子奮迅の勇を振ひ、防ぎ矢に心を配りたまへども、是また衆寡格段の相違、中々片時も堪へつべうも見えず候。

信長　して本陣は何れまて旗を進めたるぞ。

築田　沓掛には大將の旗ありと承はり候。

信長　うむ。

信長少しく考へ、

信長　佐渡。

林　はつ。

信長　其方は留守居の大將を申付くる。權六、汝は三左衛門と同心して、直ちに出陣の用意致せ。螺は其方吹け。囃子の衆遠慮致せ、さい甲冑を持參致せ。

さい畏りました。

通勝、勝家、おさいの方、各々下場。

信長（聲を潜めて）政綱、沓掛より大高に出づる道筋は。

築田　されば候ふ。桶峽間は小やかなる平地にて、木蔭も候ふ事なれば、必ず小休を爲すべき地の利なり、此處への拔け道は、善昭寺より小山を廻り、太子が根に分入れば、手に取る如き目の下候ふ。味方は十が一にも足らぬ小勢、なれば、平場の合戰は、勝利を得難し、大蛇の如き今川勢も、其胴腹を切り放さば、頭も尻も容易に亡びん。此儀如何にと思召す。

信長　おゝ瓜を割いたる汝の意見、我もさこそと思ひつるは、追手の方は佐々下野を大將にて、旗幟を多く立てさせ、我等は直ちに義元の本陣に切入りて、二つ一つの雙六軍、直寄せに推付けなば、十に六つの勝利を得ん。心に掛るは此計略の洩れんことぞ、汝と我との二人の胸中、萬一漏るることのあらば、末代迄の恨ぞ。

築田　義元の首見ぬうちは、あなかしこ、君も他言を御謹み然るべし。

信長　うふゝゝゝ。

螺鳴る。

信長　さい、鎧もて。

おさいの、方侍女等と共に甲冑を持参して登場。蛙鳴く。信長甲冑を着けながら、

信長　政綱、明日の天氣は。

築田　星は諸天に閃きて、陽氣充滿致せども、折から植込に、蛙の鳴くは時ならぬ雨やあるかと存じ候。

信長　八刻六分の干潮鼻、己午の頃には一しきり。夕立のあるならめ、其期を外さず旗本に切つて入り、有無を一時に決すべし。

築田　勇ましき御意候ふ。

螺また鳴る。林、柴田外に家臣大勢登場。信長床机に腰を掛け、

信長　出陣の盃なさむ。

侍女等銚子、盃、昆布、勝栗を携へて出て來り、酒を勸む。信長三献にして

て

信長　小姓共皷をもて、

小姓　はア。

信長皷を取りて打ちながら、

信長（謠）人間五十年化轉の内を較ぶれば夢幻の如く也、一度生を享け、滅せぬものの有るべきか。

森三左衛門尉可成馳せ來り、

森　御出陣何とて延引したまふぞ、丸根の砦は破れ候ふ、大學には討死せしと承はる、急ぎ弔ひ合戰の用意然るべし。

信長　大學が討死なしたか。

森　必死を極めし味方の者共、多年の御恩に酬ゆる時とて、多勢に誇りし敵軍を縱横無盡に驅け散らし候へば、打物業にて叶はじとて、弓鐵砲にて打

ちすくめ、遂に大學は丸に中り、馬上ながらに血を吐きて失せて候ふ。

信長　ああ大學には我等より、一時先に失せたるは。小姓共數珠もて。

小姓より受取りたる銀の大數珠を肩より襷にかけ、

信長　各々今日は生命を我れに給はれや。

一同　ははア。

信長（小歌）死なうは一定。

と謳ひかけしが、大勢に向ひ、

信長　各々囃せ、（小歌）「忍び艸には何をしよぞ、一定語り起す夜の

むはいゝゝ、馬牽け。

奥にて　はあ。

奥にて轡の音、人數のどよみ。

（幕）

甕破柴田

長光寺城の廓内

同　城内書院

返し

同　奥庭水屋

（元龜元年六月四日のこと）

登場人物

柴田修理亮勝家　四十一歳

三上太郎盛重　凡二十五歳

甕破柴田

勝家の臣青池辰馬
同　竹中寅松
同　池内龜助
同　赤鳥忠太
使者　平井甚助
供の士卒
侍女　常夏
供の下婢
兵卒　甲内
同　乙平
城方の兵大勢
小姓　二人

凡十八九歳

上

長光寺城の廓内

小丘ありて赤松生ひたり、近きあたりには同じき大木あり。兵卒二人立ちて對話。

兵甲　暑い事ぢやなう、やがて八刻下りと思ふが、この暑氣は何事ぢや、身中も熱つて焦げるも知れぬわ。

兵乙　せめて風でもあつたなら、少しは凌ぎよいと申す者だが、死人の樣に靜かな空合、いとど暑さの增さうといふものぢや。

兵甲　恨めしい樣の霽續きで、さらでも薄い用水の、根を切られたが味方の大難、日々の飲代を定められると、反つて渴きが強くなつて、嘘ではおり無い水の中なら、どんなに濁つて居やうとも、第一番に飛込むつもりぢや。

兵乙　寄手の奴等も武勇達者の柴田殿には、とても正面に敵對が出來ぬと考へたか、水を塞つて堀川の、鮒や鯰と同じ樣に、味方を渴き責に致さうぢやまで、さりとは卑怯な奴原だ。

兵甲　何と云はうが水が無いのは、兵糧に事を缺いたよりも難澁ぢや。

兵乙　いかにも膳に酒が無く、人間に女の無いのも同然ぢや。

兵甲　女と云へば腰元の常夏樣が、小女を供に今方ここを通られたのは、何處へお出なされたか。

兵乙　二の廓内の八幡宮に味方勝利の祈誓と申すが一の用ぢやよ。

兵甲　お主、面白い事をおいやる、八幡宮が一の用なりや二の用とは何ぢや。

兵乙　やれ風上には置けぬ奴、常夏御寮が軍神は八幡大菩薩の外にあるわ。

兵甲　城内には八幡宮の外に氏神は在せられぬわ。

兵乙　ははゝゝゝ、當世には珍らしい無風流の男ぢや、常夏御寮の軍神は陣中一の風流男三上太郎盛重殿ぢや。

兵甲　それにて思ひ當つたわい。三上樣も先程から此あたりを彷徨せられてあつたわ。

兵乙　人の戀路の邪魔をすると、來世は烏に生まるるさうな、分相應に我等は急いで持場へ行かう。

兵卒二人下場。三上太郎盛重上手より登場。

太郎　嚴しき暑氣かな、阿鼻焦熱の猛火も物かは、さりながら、その焦熱の猛火より、なほ誇り立つ戀路の炎、身の一大事さへ忘れ果てて、欲界の快樂に耽り、早魃も、籠城も、魂ここにあらざれば、苦樂の外に打捨てたり、放るるときは逢瀨に憧がれ、逢ふときは夢に過ごしつけふは遽かに消息して我等に逢はんと申越せしが、待てども遲き女の足、屠所へ赴く羊なりとも、今少しは早からうに。

婢女を先きに常夏下手より登場。婢、太郎を見て常夏の袖を牽く。常夏點頭く。婢、左右を見廻し常夏に目禮して下場。

太郎（あたりを見ながら）常夏殿。

常夏　盛重樣。

太郎　其處は暑うおぢやる、木蔭へ參られい、さて對陣の忙しき中に火急用事の出來せしとは何事の起りしにか、とう〳〵語られい。

常夏　火急の用事と申せしも貴方のお顏を見たい爲め。

太郎　なに見たい爲め。

常夏　さア貴方のお目にかかる外には、妾に用事はありませぬ。

太郎　常夏殿、常とは時が違ふぞや、大將の下知によつては直ぐにも敵陣に切つて入るべき今日なるに、唯逢ひたいのみが用事なりとは戯れも時にこそよれ。

常夏　すりやお呼び申したをお叱りあるぢやまで。

太郎　いかにも。

常夏　これはまた思の外のお言葉かな、戀路にそんな道理があつてか、戀と戀との其中には、逢瀨より大事はない、女だてらに大膽な、八幡樣を枷に使ひ、漸く御目にかかつたに、無情うおぢやるも程がある。

太郎　無情とのみ申されな、對陣の其中にて憚りも無く語らはば、惡事千里の人の口、もとより狹き城の中に、なほ身を狹ばくなさんかと、思ふも汝と我れとの爲め。

常夏　益ない懸念を起したまふも、御心淺き故にこそ、たとへ浮名が立たうとも、または顯はれ罪の下に、命を捨てうと悔はせじ、貴方と共にあるならば、地獄の釜の火の下でも、安樂淨土と思はうもの、

太郎　晴れて汝と添ふまでは、いとど大事の我が命ぢや、さりとて月を越えた

る籠城勢ひ日々に増さる敵勢、とても勝利は覺束無く、唯幾日を支へやうかと、云ふに止まる味方の有様、互の命は迫まつたぞ。

常夏　さては本國からの助勢は。

太郎　得参るまい、名に負ふ浅井朝倉二家の軍勢、殊に叡山の山徒まで力を合せたれば、本國よりの御發向は覺束無しと思はれたり。いま我等に降りかかる禍を福に反さん術あれど、とても汝に語り難し、只手を束ねて運命の、車の轍にまさぐられう。

常夏　禍を福に反さん術ありとは、いかなる事か、御聞かせなきとは恨めしや。

太郎　さ、とても汝の同心すべき筈無ければ……

常夏　いや貴方の心に叶ふ事なら……、たとへ命を捨てやうとも。

太郎　はて捨つる命を助けうとてなるに、などて、さらば大事を語り申さむ、四邊に心を配りたまへや。

兩人左右を見廻して元の座に復す。

夏常　幸い四邊に人も無し、事の仔細をとう語りたまへ。

太郎　御身が預り居る水屋の鍵を我等に暫く借したまへ。斯くのみにては、いかに慧き汝とて悟り得られじ、寄手は既に城内の水道を斷ち切つたれば、落城束の間なるべしと、思ふにかへて扨目なき勝家殿、數多の甕に天水を貯へ置き、士卒に頒ち與ふ、されば敵に取りては水屋の水こそ一の仇、この仇を倒し、是れを引手に敵陣に身を任さば、恩賞は思の儘、さあらば生命を助かる上に、おん身と晴れて添ひ遂げ得べし。

常夏　え、え、さては盛重様には六角方に降参せうと仰有るのか。

太郎　降参なんどと汚らはし、實は我れは佐々木家にさる者ありと知られた る、鯰江相摸守が子供なり、幼なさより都に育ち、面體見知れるもの無きを幸ひ主に取りては大敵たる、織田家に奉公なしたるは、一つの功を立てん

が爲めなり、忍び入つて甕を碎かば、それぞ即ち柴田殿を打ちしも同じ、斯く打明けたる上からは、よも汝に異存はあるまじ。

常夏　さては貴方は敵方の……。

太郎　間者でおざる。

常夏　はあ……（泣伏す）

太郎　常夏殿、いかがでおぢやる、鍵を借させらるるか、但しは否か。

常夏　貸さぬと云へば。

太郎　盛重が身の切迫、腹掻割いて失するまで。

常夏　そはまた短慮。

太郎　いや多年の計策も畫餅となれば、生きて阿容々々歸られうぞ。

常夏　さりとて味方を失はれうか、此上は盛重樣妾を共に殺してたべ。

太郎　そりやならぬ。

常夏　とは、またなぜに。

太郎　盛重に隨はぬ女、共に死なうとは無禮なり、鍵を貸したまはずば、末代までも仇と仇、なにとて共に死すべきか。

常夏　すりや死なうにも死なれぬか。

太郎　鍵を貸さうか。

夏常　それは。

太郎　縁を切らうか。

常夏　それは。

太郎　いや我れながら誤まつたり、我に佐々木が主なれば、御身に柴田も主にてある、我れを立てて人を立てぬは、情を知らぬ所業、さらば當夏殿、これまでは幻の夢にてあるぞよ、

盛重立つて下手に行く。

常夏　なう待ちたまへ。

盛重の手を取りて縋りつゝ。

常夏　女は出でて夫に從ふ。云換はせし上からは、いかにも貴方に從ひまする、宵月落つる亥の刻過ぎ、奥庭に忍びたまはば。

太郎　その時鍵を渡されうとか。

常夏　あい。

（幕、若しくは廻す）

中

城内書院

座敷には柴田修理亮勝家熊皮の上に坐して中央に踞坐す。二人の小姓は左右に侍し、家臣四名は前面に居並びて評議の體なり。

柴田　辰馬、天氣の變はる模樣もないか。

辰馬　はつ（椽先に出でて空を見遣り）されば空には白雲のふわりふわりと漂ふばかり、夕立などの起る氣合も見え申さぬ。

柴田　生温こい佐々木承禎が陣立、四千餘人を引連れても、四百に足らぬ小勢を恐れ、有無の合戰を兎角に嫌ひ、長卷の氣長軍、たとへば籠城月を越さうと、敢て憚る敵にはあらねど、元が領主の事なれば、百姓原も敵となり、終に筧を切り放され、飲水に事を缺かせられては、數萬の敵を取拉ぐ、味方の武勇も用ふるに所なし、あはれ一村雨も來よかし、他くまで人馬に水を與へ、一擧に敵を敗ちうずるに。

寅松　仰の如く、憎き土民の內通にて、水道は立切られ候へども、御用意の大甕に、他くまで水を湛たへたれば、足らぬながらも籠城は續き申す。

龜助　只氣遣はしう候は、大甕の水の盡きざる中に、館殿の御加勢到着の有無、

一合を五勺に減じても、持堪へが肝要なりと存じ候。

忠太　此分にては日に増し味方の勇氣は細り、目醒ましい軍はなり申さず、さらでも暑い土用の最中、飲水に事を缺さては、潦の鮒も同樣、飛出さんは思ひも寄らず。

柴田　いや館を頼む存念なし、柴田が加勢には半時ばかりの雨か欲しいわ。

士卒一人登場。

士卒　申上まする。

忠太　何事なるぞ。

士卒　只今敵陣より御見舞として使者を差越し候。

柴田　なに、見舞に使者が來た、是れへ通せ。

士卒　はッ。

士卒下場。柴田は辰馬に呼くことあり。辰馬立つて襖の内に入る。

柴田座を改む。使者平井甚助士卒に酒肴を携へさせて登場。寅松庭前に下り、

寅松　御使者、これへ御通り下されませい。

平井　さらば御免下され。

使者座敷に上り、着座して一禮なし。

平井　拙者事は佐々木承禎が家臣平井甚助と申する者でおりやる。主人承禎申し候は、此度不思議の出會長々の御籠城嘸御氣欝てござらう、無禮ながら御見舞として、湖水にて漁り候ふ源五郎鮒到來の伊丹の銘酒一升、進上申候との事でおりやる。

柴田　道がに京近い近江の國主が御心田舍者の柴田なんどが思ひも寄らぬ風流の馳走、酒は伊丹の銘物、肴は湖水の源五郎鮒とや、御承知の有樣なれば、分けて生肴は珍重致す、早速ながら賞翫仕つらう。誰そある、盃もて。

辰馬　はア。

奥より辰馬昆布、盃を持参し來る。勝家取つて小姓に酌させ飲まんとす）

太郎　暫く。

聲掛けて三上太郎下手より登場。

柴田　太郎何事ぢや。

太郎　敵方より送り越したるそれなる酒肴を、毒味も遊ばされずに參るとは、餘りなるおん侘り。

柴田　はは、、、晴の軍に鴆毒を用ひて敵を害める者やあらむ。

平井　お疑は一應の道理、さあらば拙者鬼役をお勤め申さう。

平井盃を取らんとす。

柴田　いや〳〵多からぬ酒肴、御不自由なき御使者が接伴、有難過ぎて迷惑致す。

太郎　さらば、毒味も無くて召されまするか。

柴田（酒を飲んで）甘露々々城内にも味の能からぬ地酒の候、御使者に一献差上い。

平井　いや〳〵拙者は下戸に候へば御無用々々、持參爲したる酒肴を、直に御風味下されしは、拙者の面目此上はおざらぬ、付いては一つ御無心がござる、何卒手水を給はりたい。

辰馬　なに御手水とか、それ。

小姓二人立ちて飯臺に水を入れたるを運び來る。

平井　然らば御免下され、いや本日の暑氣はまた格別でござつた、是れは〳〵、手水にしては格外の水、かくまで多くの……さらば無禮仕る。

面を洗ひ嗽ぎなどして、元の座に復す。小姓二人立ちて椽より下へ

水を捨てて、飯壺を運び去る。平井見て驚く。

平井　暑中には冷水が何よりの馳走、多分に給はり忝けない。（前面の方を見て）やや、あれなる木蔭に多くの馬を引出されたは。

柴田　御配慮無用、夕、暮なれば馬共に洗足をさせ申すのぢや。

平井　なに、あの馬に洗足、この旱魃に清水を、あれ、さりとは無益しい、多くの水を、いやなに柴田殿、拙者は是れにて御暇申す、

柴田　佐々木殿の御芳志宜しく御禮を、

平井　申し傳へ候ふべし。

平井甚助不審なる面色にて下場。太郎は手水を捨てたる邊を見て、

太郎　數十人が一日分の桝數ぢやに。

柴田　水の樣子を伺はうとて、見い、酒と肴を遣し居つたわ。

寅松　さりながら、あの廣庭に馬を引出し、あれ未だ清水にて洗足を致させるは。

龜助　廐の小者が暑氣に中り、物に狂ふて爲すわざか。

忠太　微笑みながら其儘に、見やりたまひて捨置かるるは、

寅松　いかなる事で。

三人　おりやりまするな。

柴田　それぞ計略、水と見ゆるは白米ぢや。

一同　え。

柴田　今がた來りし小才の使者、手水を乞ひてそれとなく樣子を伺ふ、さるに依つてたぶ〳〵と水を汲ませ其上遠き廣庭にて、清水と見せて白米を、馬足に濺がせしは、敵に油斷をさせう爲ぢや。

辰馬　君の計策圖に中り、馬足に注げる白米を、見たるときの愕きかた。

寅松　飛礫を受けたる烏の如く、立居を忘れ、度を失ひ、

龜助　言句も出でず眼を瞠り、世に不思議なる面色にて、

忠太　直にお暇仕り慌だしう歸つてござる。

太郎　かくとも知らず敵方にては、手薄と思ひし用水も、有り餘るぞと心得て軍評議も狂ひ申さん。

勝家は大笑をなして立上り。

柴田　はて、心地えい事であつたよ。

（幕）

返し

下

奥庭水屋

物古りたる杉木立の下に、板戸にて圍ひたる水屋あり、嚴しく錠を下したり。

木立の間より常夏被衣を蒙りて登場。

常夏　月も落ちたる合圖の刻限、あの太郎樣は何してゞ、思へば不思議の今夜の仕儀、戀は惡趣の近道ぞ、御主も忘れ、味方も忘れ、天も地も敵として、間者の夫に付かうか、天道樣もあんまりな、少女の胸に戀草の芽生をさせて、敵の味方の軍のと、雪霜霰を並べたて、散々に艱ませて、孱弱い女を苛なむのか、ああどうぞして太郎樣が間者でなく、御館樣が佐々木の仇でなかつたら、こんな辛苦はあるまいもの、儘にならぬが煩惱の、浮世は輪廻の闇なれや。

人の來る氣色に、常夏木蔭に身を隠す。太郎下手より登場。

太郎（小聲にて）常夏々々。

常夏　あい。

常夏木蔭より出づ。

太郎　鍵は。

常夏　なに鍵とや、さりとは、御心、人目を窃み忍び出でた常夏よりも、この鍵がさほどに愛しうおぢやるかの、えゝ腹立ちや、とても見替られた此鍵を、渡すも反りて腹が苛られる、さうぢや、一層のこと捨てゝ退けう。

鍵を地に擲つ。

太郎　やや、太切の鍵を。

常夏　又しても鍵とや、聞こえた、鍵の外には太切の者は無いのぢやな。

常夏太郎の方へ摩り寄る、太郎手を取りて、

太郎　いかに女と云ひながら、あまりの譫語、常夏聞かれい、つねの逢瀬とは違ふぞや、御身の幸は我の幸、水屋の扉も二人の運も、開くべき鍵なるに、時移らば如何にせん。

常夏　ほんに一時の腹立に、鍵を捨てたは私の誤り、確かに此邊と思ひました。

太郎　此あたりにて音せしやうぞ。

二人探せども見當らざるに、太郎腰より燧袋を出して火光にて捜索す。其中に常夏鍵を發見して太郎に渡す。

太郎　あたりに心を付けい。

水屋の鍵を開きて中に入る。常夏木蔭に忍ばんとす。龕燈を携へたる忍びの武士登場。

武士　曲者。

武士常夏を捕へんとす。常夏拂つて、龕燈を落とす。武士は『曲者々々』と連呼す。水屋より太郎出でて武士を斬る。其中に二三人の武士馳せ來りて暗闘。常夏は木蔭に忍ひ居る。終に松明を携へたる武士數人出て來る。太郎奮闘す。柴田勝家小具足長刀を持ちて登場。

柴田　謀叛人め、推参なるぞ。

太郎は左右の武士を防ぎつゝ、水屋の戸を後にして、

太郎　やあ謀叛人にあらず、生れ付いての六角方ぞ。

柴田　なに六角方とは。

太郎　さる者ありと知られたる鯰江相模守が一子同苗太郎盛重、かくと名乗り申す上は、尋常に勝負あれ。

柴田　小賢しい小わつぱめ、さりながら、我が面前にて名乗を揚げし勇氣に免じ、身が相手を致しくれるわ。

柴田進み出て二三合にして直に高股を薙ぐ。太郎倒る。木蔭より常夏出て、

常夏　やや、太郎様が。

と太郎に近づく。勝家は目も觸れず、士卒の松明を取りて水屋に入る。士卒は呆れて暫時啞然たり。勝家水屋より出でて士卒に向ひ

柴田　申すべきことあるぞ、組々の頭人共に、急ぎて是れへ參るやう洩れなく申せ。

松明を携へたる武士等左右に馳せ行く。太郎刀を杖に起き上り、

太郎　此上は、はや〳〵命を取りたまへ。

柴田　ほゝ健氣なる奴、鯰江相模守が一子とは始めて聞きつる敵の間者、いかにも命は止めてくれん、さりながら水屋へは何故あつて忍び入りしぞ。

太郎　甕を破つて捨てうため、さあらば味方の勝利ならんと、思ひ込んだる我が企も、運拙くして斯くの仕儀。

柴田　やあ女、太切の鍵を何にとて人に與へしぞ。

常夏（太郎の小刀を取りて喉を突き）二世を交せし夫の頼み、命を懸けて渡しました。

士卒大勢左右より登場、追々に居並ぶ。柴田は持ち來れる床几に腰を掛け、

柴田　水屋の戸を取りはなせ。

士卒四人程にて水屋の戸を撤去す。勝家立つて士卒に向ひ、

柴田　いかに方々承はれい。

一同　はア。

柴田　そも此度の合戰、敵は數千の大勢なるに、味方は漸く二百騎に足らぬ小勢ながら、久しき籠城に持ち堪へたるは方々の働き、勝家に取りて嬉しく思ふぞ、また館の御感斜ならずと存ずるぞ、然るに敵は土民を語らひ、用水の筧を切り放したれば、味方いかに猛しとて、乾ける喉ほ濕ほし難く、終には陸地の魚同然、忽ち命を落とすべし、見られよ數の甕の中、只一つを除きては、水の入りたるものも無し、明日を限りの名殘の甘露、いま酌みかはして今生の思ひ出となさんはいかに。

辰馬　仰せ畏まつて候。

柴田　さらば吸筒に一杯宛を計り、組下の物共にも分たれい。

士卒各々水を酌む。勝家も士卒が薦むる吸筒に喉を濕ほし。

柴田　今こそは一滴たりとも殘れる水なし。

柴田立ち上り、持ちたる長刀の石突にて甕を壞る。一同愕然。

柴田　甕は土に歸つたは、天に迫まられ澡き死に、乾鰈の如く、へたばり失するか、但しは敵中に切入つて、甘露の血汐に濕ふべきか、一日生きて憶病者となるべきか、一刻早く命を捨てて勇者とならうか、人間の花盛、其儘に萎らかすは無念ざうぞ、誘ふ山風に連れて散らさんはいかに。

辰馬　仰せの如く所詮死すべくば敵の刃にかかりたし。

寅松　渚に殘りし小魚の如く、乾枯び死なんは殘念千萬。

龜助　冥途の道連れ一人たりとも、多き程が面白し。

忠太　切つて切つて切入つて、敵の血汐に湯浴を仕らう。

柴田　勇ましく、急ぎて用意致せ。

一同　はゝア。

一同下場。勝家も行かんとするを、

太郎　いかに勝家、殿、遽かに御出陣とや。

柴田　思ひ付いたる早速の掛引、甕を破つて味方を激まし、危ふき合戰の首途なるわ。

太郎　必死を極めし城方に不意打されては、味方の敗北まのあたり、其の源は太郎が振舞、反りて主を害ひたるか。

常夏　三世の御主の目を盜み、掠め事せし天罰か。

太郎　敵と味方の戀の果。

常夏　主を捨てたる戀の末。

太郎　いざや常夏。

常夏　盛重樣。

二人相刺して斃る。柴田悵然として、

柴田　運命の期する處、吉凶を天に任せし今夜の軍、勝利はいまだ定かならねど、望める戀に身を終りし、悶えに悶えし二人の者は、安らけく勝利を遂げしぞ、あはれにも心ゆくかな、美はしき者は世を終つて彼岸に去りぬ、なにとて我れは長刀に深き戀をば懸けたりしぞ。

（幕）

佐良佐良越

上　立山村常太夫の宅（越中國）

下　左良左良越の頂上（越中信濃國堺）

　　左良左良越の麓（信濃國）

（天正十二年十二月のこと）

登場人物

佐々内藏介成政

近侍武士三名

獵師　常太夫

佐良佐良越

（三十三四歳）

七つ桔梗

娘　小百合

狩人　鳶　六

同　鍬　三

立山村の庄屋

信州口の狩人大勢

（十八歳）

上

立山村常太夫の宅

外面には皚々たる雪降り積り道も分かたず、家内にては榾火を焚きて獵夫二人爐邊に坐せり。壁に羚羊の皮を掛けたるは主の獵着なり。

鳶六　來年も豐年ぢやと見えて能う降るなう。

鍬三　されば さ、雪は豐年の貢だといふが、狩人には、禁物ぢや。

鳶六　近年鐵砲が渡つて來たので、猪も猴も打ち盡くし、以前の樣に獲物がないわい。

鍬三　山又山の峯續き、立山越へ逃げ込んで、山の此方には滅多に影も見せをらぬ。

鳶六　何んでも一番淨土山をおッ越えて、此家の親父の能く話す、黑部の河原へでも行つたなら、少しは獲物もあらうと思ふ、何んでも今日は左良左良越の見當だけでも敎へて貰ひたいものだ。

鍬三　今年の春も雁八が舞込んだきり歸つて來ず、一昨年の秋も馬五郎が跳ね込んだ儘、便りが無い、魔所と名の付く黑部の河原、地獄に近い針木嶺、そんな所は眞ッ平だ。

鳶六　主の樣に生地が無くて、狩人稼業が出來るものか、どうで生者を殺すが

商買だ。

鍬三　常々此處の親父が口癖に、小百合坊の婿讓りの引出物には、左良左良越の間道を敎へるとの事だが、なに間道なんどはどうても能い、小百合坊の婿になれたら今の嬶は捨てる積りだ。

鳶六　あの貴樣が、

鍬三　おこてや。

鳶六　烏に驚かどえらい事を云ひ居るわい、ははは、、、、。

屏風の中にて、

小百合　皆樣少し靜かにして下さんせ。

二人　おい〳〵。

小百合屏風を引廻す。中に常太夫枕に倚りて床上に坐す。

常太夫　やれ〳〵雪道を、毎日えら太儀ぢやの、

鳶六　なんの〳〵、奥と云つても未だ里近い立山村、溫泉のあるお蔭には、雪も少しは淺い事ぢやて。

鍬三　親父よ、今日は少しは快いかや。

常太夫　おいの、雪の中はとても起つ事は出來ぬのぢや。

鍬三　時にのう、此中から度々頼み込む左良左良越の間道を、切めて見當なりと敎へて下さるまいか。

鳶六　近頃仕合せが惡いので、奥へ踏み込まうかと思つて居るがの、雁八や馬五郎の眞似をしても初まらない、迚も針木へは及びも付かぬが、せめて黑部の川原迄の道筋を敎へて貰ひたいが、何とあらうな。

常太夫　されば、よ、知つての通りの場所、この道を敎はる男は、娘の婿より無い筈ぢや。

鳶六　だからよ親父、皆が皆まて敎へてくれとは云はないのだ、せめて半分、

常太夫　いや、そりやならぬ、云ひ出した事は、一寸も後へ引かない常太夫、鎮守様のお告でも、是ればかりは云はれない。

鍬三　おゝ、是れ程頼んでも敎へてくれぬ、片意地の親父殿、婿の極まらぬうち死なれたら、一體何んとするぞい。

常太夫　命を的に探し出した信州への間道、何時にならうと天地は變ることでない、敎へぬうちに死んで終つたら、誰れかまた見付けるまてぢや、若い癖に引腰の無い和郎達、自分の骨折て探しなさるがよい。

鳶六　いや強情な親父だ。

鍬三　鳶六去なう。

鳶六　さうだ〳〵親父大事にさんせ。

鍬三　小百合御、さらば。

常太夫　また御座れ。

小百合　有難うござりました。

鳶六、鍬三下場。

小百合　若し父さん、仲間の人もあの樣に云つてぢやに、何故に敎へて遣らぬのぢやぞへ。

常太夫　乃公の大事の稼ぎ場、若い折二月餘りの山入り、左良左良越と名が殘るからは行かれぬ事は有るまいと、探しあてた信州道、己の家の一の寶、狩人には田地田畠、跡取の外に話せるもので無い。

小百合　父さん、私の婿になるのは、誰れぢやわいな。

常太夫　されば、何れも同じ狩人許り、猪猿を友にすれば、眉目形姿まで似寄つてしまひ、この常太夫の婿らしい逸物は見當らぬ。

話の最中に庄屋を案内に、佐々内藏介成政、從者三名を召連れて登場。

佐良佐良越

庄屋　常太夫宅にか。

常太夫　ハイ〳〵、

小百合　庄屋様何か御用で、

庄屋　下に居ろ。

常太夫小百合は訝かりながら座を改む。庄屋外面に出てて拜伏す。成政等入りて小百合を見て美貌に驚く。小百合耻らふ。成政等座に着く。

庄屋　常太夫頭が高いぞ。

常太夫　ハア、

庄屋　ここに御出なされたは御領主様だぞ。

常太夫　なに御領主様が……

庄屋　おゝ何や知らぬが、其方にお頼みなさることがあるとて御成りになつ

たわ

常太夫　ハテナ。

成政　其不審尤も。雪を冒して參りしは、信州への案内が頼みたい。

常太夫　聞こえた、待鐵砲に大熊の掛つたよりも無い圖ぢやと思ひましたが、御領主様は此親父のたつた一つの寶物が欲しいのでござらせた、ハイ其道は承知しては居りまするが、此節では迚も御出てにはなれませぬ命掛けの危ない道、お止めになつたがよござりまする。

庄屋　これ〳〵常太夫、氣を付けて物を云へいやい、峯から峯を見通して、谷を亘る間道、つい一言云つて終へば、鳩を打つより容易いと、初終話して居たてはないか。

常太夫　や、

庄屋　御領主様は氣が短い、知つてる通りを話しなさい。

常太夫　嫌ぢや、苦勞を重ねて覺えた難道、士が國城を乘取たも同じ事、婿に取る男の外には話が出來ぬ。

成政　無禮なう匹夫、我が領分にて渡世を營みながら、知つたる事を云はじとや。

常太夫　はい云ひませぬ、今も仲間の者が來て、渡世に困るからと達ての賴みにも、口を噤んだ道の話、どうぞ御免下さりませ。

成政　こりや能く聞け、成政が道を問ふは、天下の爲めぢや、加賀と越後に敵を受け、東海道に音信叶はず、越中一國が生死の境、成政一騎忍び出て加勢を求むる大事の場合、道の案内が天下の役に、立つと申すは汝も仕合せ、褒美は望みに任せやう。

常太夫　褒美欲しうござらぬ、明けても暮れても山の中、能い着物も入りませぬ、腹を減らしての握り飯、やこいつ、いかな馳走も叶ひませぬて、猪猿さへ山に居れば、事の缺かない獵師の身の上ぢや。

小百合　これ父さん、御領主樣の前ぢやに、靜かに物を云ひなさんせ。

常太夫　おいのう、天下の爲めと云はしつても、西にならうが東にならうが、吹く風より心配にはならぬぞい。

從士の一　慢くき親父め、君の御前も憚らず。

同二　口から先きの雜言を、散々に吐き散らし、

同三　御意に悖りし無體の振舞、

同一　達て否まば、

三人　容赦はせぬぞ。

常太夫　おゝ老先き短かい常太夫、切るとも突くとも勝手にさんせ。

近侍　其儀ならば親子共々。

侍は二人を引据うる。

成政　こりや待て、

近侍　ハツ、

成政　常太夫承はれ、婿に限つて敬へると申張るが、その男は何者なるぞ。

庄屋　庄屋申上まする、まだ定まつた者とてござりませぬ。

成政　無いと申すか、更らば問はうが、我意を悖く罪科にて、親子諸共命を失なはゞ、その娘の夫には誰がなるぞ。

常太夫　さアそれは、

成政　死骸の婿には誰れがなる。

常太夫　大方地獄の鬼でもなりませう。

成政　ありもせぬ婿への義理立ては愚かな事なり。

常太夫　いゝや云はぬ、片意地で立てた誓言、なアに片意地の前には、娘でも生命でも惜しいとは思はぬ。

成政　婿にならではお云ひやらぬとか、

常太夫　はい、

成政　是非に及ばぬ罷り歸らう。

成政立つ。家臣等も尾して外面に出づ。成政頤にて家臣等を先きへ歸らしめ、獨り屋後に潜む。ややあつて小百合は門邊に出で、茫然として行方を見遣る。

常太夫　小百合、小百合（やゝ高く）小百合、

小百合　あい。

常太夫　寒うなつた。

小百合　父さん長いこと出て、居られて冷えたであらう、さア床へ入らさんせ。

常太夫　床上に坐す。

小百合　もし父さん御領主様は立派な方ぢやの、

常太夫　何處から何處まで氣に入つた男振り、越中一國を腕で取つた程はあふ
小百合　強さうの中にも鷹揚の所が見え、村一番の庄屋さんも、御領主樣と並べ
ると大樹の傍の小芝艸。
常太夫　儘になるなら婿にしたいが、獵師でなうて御領主樣、大分似寄つた讀み
聲だが、身分は大きな相違ぢやわい。
小百合　あれ父さん、滅相なこと云はんすな。
佐々成政以前より門口に佇み居りしが、中に入り、
成政　佐々内藏介成政、常太夫の婿料に相成らう。
常太夫　やア、
成政　鄙に稀なる娘の縹緻、心を掛くる道の案内を婿引出とあるからは、能き
武者の一番首に、加へたる業物の分捕、氷人なしの推掛聟ぞ。
常太夫　そりや、飲込めぬ、親父からおッ惚れた男振り、否やは無い筈ぢやが、道案
内だけに惚れたらしい御領主樣、まこと娘が御望みなら、代々稼業の狩
人商買、猪猿を相手に日を送らつしやるか。
成政　むゝ、
成政思案する。小百合は此時壁に掛かれる獸皮の袖無しを取りて、
物をも云はず成政に着せしむ。成政點頭き、
成政　親父之れを見い、成政が狩人出立、親父は高が猪、猿相手、我れは日本國を
狩倉と爲し、大名小名を狩立てゝ見せ申すわ。
常太夫　いや、此方さんも片意地もの、下素の下素たる狩人に聟と呼ばれてさへ、
聞き度と仰有る左良左良越、此日和では覺束無いが命を懸けて行かし
やるか。
成政　いかにも。
常太夫　勇ましい事ぢや、病氣て無くばな……

小百合　父さん、私が參りませう。

常太夫　なにわれが行く、よし！よし！此立山の峰續き、淨土山から黑部の河原まで、迷路の多い所は此夏敎へて置いた、それから先きは、夏でも雪の白馬ヶ嶽、空へ竿立の鏃ヶ嶽、これを左に見て、天を突拔いた樣な山の横腹を、羚羊と同じに走つて行けば針木嶺晴れた日には糸魚川の街道は糸の樣に見ゆるわい。

成政　かかる難所を案内せんこと、嫌き女に叶ふまじ。

常太夫　女と申しても狩人の娘參ると自分で云ふからは、連れて行かつしやれ。

小百合　たとへ命を失ひましても、御供を致して參りませう。

成政　外へ出て短銃を放す。

常太夫　今の音は、

成政　供を呼ぶ合圖ぢや。

常太夫　穢くるしうても家根のあるだけ、野宿代りに今夜はここへ

成政　押掛の花聟、風を厭うて宿を借らうぞ。

爐の火燃え上りて、耻かし氣なる小百合の面を照らす。

下

左良左良越の頂上

雪間より巖の尖角露はれたり。空は灰色。

歌　それ神代の昔より、降り積む雪の左良左良越、
峰も巖も氷り閉ぢ、雷鳥は塒に潜み、滿目皆白
妙に、埋もる谷へ、銀も擲つ山嵐、峰は嵐のいと
凄く、哮り立てたる雪吹雪、面を向けん樣ぞ無

き。

成政、小百合、從士三名、雪沓、藁にて作れる頭巾、杖を突きて上り來る。

小百合　我君、頂上には最う一足でございまする。

成政　おゝ漸くに着いた。

一行頂上に立つ。風激しく來り、從士前後に吹き落され、小百合は伏し、成政獨り風に逆らつて立ちしが、下へ降り、各一所に圍居す。

成政　激しい風であつたわ。

小百合　御覽候へ、峰は嵐の隙無ければ、是れ程降れる大雪にも、吹き拂はれて岩角の、露はれ出てて居りまする。

成政　おゝ聞きしに勝る風の強さぢや、いかに方々遙かに谷間を眺むれば、唯一文字に千仞の、壁を立てたる下り阪、

從士の一　いかさま此處を下らんこと、人力にては叶ひ難く覺え候。

同二　高きを翔ける鳥類さへ、翼を休めて塒に歸り、

同三　天地の間に動く者とては、我等の外に候はず、

同一　淨土山を下りしときの樵さへあらばそれに乘り、

同二　主從の運は天に任せ、一目散に駈け下らんに、

同三　黑部の川原に捨て置きしは、殘念至極に、

一同　存じ候。

成政　樵無き時は常盤木の、枝にて造らん術もあれど、嚴許りの針木嶺、これに當惑致いた。

小百合　我が君、異木こそ候はね、深山には偃松とて、高きに生ふる木の候ふ。

成政　げに偃松こそ能かんめれ、巖の陰の雪を穿ちて、綠の色を探り候へ。

從士　心得て候。

從士の面々下方へ降る。

佐良佐良越

成政　男子も阻む雪の山道、よくぞ汝は參られしぞ。

小百合　戀の炎の燃え候へば、雪も寒しと思はばこそ。

成政　面白き事を言ふものかな、我も常より暖かく覺ゆるは、汝が情の此皮ぞ。

前の袖無の皮羽織を指して云ふ。

小百合　深山に住める羚羊を、剝ぎて造れる皮を着れば、雪に伏しても寒からず

と聞きました。

成政　その寒からぬ羚羊にも、增せる汝の思にて、降り積む雪も春の心地ぢや。

小百合　御嶽の上に唯二人、佇み居れば親も身も、十八年の生涯も、幻の樣に思はれまする。

成政　うい奴、よう來居つた。

二人寄添ふ。吹雪、從士松にて造りし橇を引きて上り來る。

成政　さらば是れより下らうぞ。

小百合　その魁はこの小百合、思はぬ谷へ落ちたまはば、心盡くしも水の泡。

成政　うはゝゝゝゝ、病氣と披露し、引籠りたると見せかけ、遠州へ驅け通り、德川殿と申合せ、猿面冠者を討たん計略、天下を望む佐々の幸先、女の先驅不勝なり、落ちなば落ちよ陷いらば、冥途に攻め入り閻魔王に、一泡吹かせやうぞ。

一同　心得て候。

各々橇を引上げ、巖角の上に昇りて用意を爲す。

成政　いでや下らん。

雪激しく降つて咫尺を辨ぜず。

（幕）

返し

佐良佐良越

左良左良越の麓

針木嶺の麓、小屋の中に火を焚さて狩人四人相對したり。鐵砲山刀等を傍らに置き、門口には板木を掛けたり。風凄まじく過ぎ渡る。

狩人の一　酷い風ぢや、目も口も雪に塞がれて、聲も出ぬわやい、

同二　いつもならば自家に居て、濁酒など飲まうもの、人ッ子一人通りもせない、道の番とは情ない。

同三　なんぼ山國の生まれでも、朝から晩まで雪の中、冬中は火焚の外に用なしとは、退屈の事であるわい。

同四　一體この道番と云ふのは、何ういふ譯てするのてあらう、誰れか承知の者は無いか。

同一　譯を知らずば云うて聞かさう、この信州も近頃ては、羽柴秀吉といふ大將の領内になつたがの、越後には上杉家、また越中一國は佐々内藏介成政といふのが領主ぢや、此糸魚川の街道は、三國が入り搦みの事なれば、敵方の間者がいつ何時、通行せぬとも限り難い、其時には生取つてなり首にするなりして、御地頭樣へ申出ろとの事で、この番小屋が建てられたのぢや。

同二　道と云つても一本道、それとも昔咄しに名の殘る、針木嶺の左良々々越、この大崖を傳はつてても來るだらうか。

同三　狗賓樣なら知らぬ事、人間に其樣な事が出來得るものか。

同四　人馬の通ふ街道でも、此通りの難義な道、ここさへ通る人はあるまい。

同一　さうとも〳〵、狩場の勢子なら鹿も來やう、かうして鼻を揃へても、兎一匹來ることてはない。

此折から雷鳥三四羽崖の上より遽だしく翔り來る。狩人等「雷鳥だ

〳〵』と云ひつゝ表へ出て、捕へんとして追逃がす此うち狩人等崖上を見て、

狩人の一　や、や皆の衆見ろやい。

同二　あれ人が來る〳〵。

同三　二人だぞ、あ、三人ぢや。

同四　四人ぢや。

同二　何んであらう。

同四　間者ではあるまいか。

同一　用心しろ〳〵。

各々得物を携ふ。板木を叩く。村の者次第に驅け付く。其内に崖上より成政の從士樵にて勢ひ好く下り來る。

狩人の一　來たぞ〳〵、迂散らしい奴が來たぞ。

同二　打殺せ〳〵。

同三　縛れ〳〵。

從士等樵より出て、

從士の一　土民の身として我等に向ひ、

同二　手向ひなすとは奇怪なり、

同三　立退いて通し居れい。

狩人の一　遂に見馴れぬ怪しい士、間者とやらに極まつた。搦め取つて褒美にしろ。

遲れて下り來れる佐々成政の樵は、崖の中程にある松に打當りて留まる。雪散つて落花の如し。成政屹と下を見る。續きて下れる小百合の樵は下方迄達したり。小百合樵を出づ。

狩人の二三人　やア女だ〳〵、天人の樣な女。

成政松の枝に縋つて垂下し、狩人達に對し、

成政　御身達は何と致すぞ。

狩人の一　怪しい者が通つたら、搦めろと云ふ御領主樣の命付だ。

同二　狩人の我達でさへ通らぬ、山の中から飛び出した化現の侍、

同三　間者とやらに違ひない、

同四　庄屋の屋敷へ連れて行け、

大勢　それが好い〳〵。

成政　靜まられい狩人達、我れは怪しき間者に非ず、人倫絶えたる險所を通るも、天下の大事の爲めなるぞ。

狩人の三　天下の大事ぢやとよ。

同二　天下の大事が何あらうぞ、それとも天下の大事といふのは、此山々でも亡くなるのか。

同四　山さへあれば狩人は、世間が何とあらう共、搏う事は無いわい。

成政　さりとは疎い狩人達、猪、猿、鹿を取りたりとて、商人無くば何とするぞ。

大勢　やア。

『ほんにさうぢや』『尤もぢや』など云ふ。

成政　應仁以來麻糸と、亂れたる世を泰平の、昔の春に歸さんとて、雪を踏分け通る折なり、斯く申すは越中の國富山の城主佐々内藏介成政なるぞ。

狩人の一　鬼と名代の大將ぢや。

同二　富山の御城主ぢやとよ。

同三　越中から來たと云へば、佐良佐良越を來たのであらう。

同四　狗賓樣にしては鼻が低い。

同五　山の神にしては顏が優さしい。

同六　天人の樣なのは何んぢや

同七　山姥でもあるまい。

同八　石楠花の化けたのか。

同一　いや〳〵是れは生き神様ぢや。

同二　神様に違ひない。

同三　羚羊も翔けられない、針木嶺を越された方ぢや、

同四　さなくば天から降つて來たのだ。

同五　空を迫ぎつた壁を打破つた人だ。

同六　飛ぶ鳥も越せない峰を越して來た、

同七　人間の天狗様ぢや。

同八　何んても神様ぢや。

成政　いゝや、神にあらねど成政は、天下の難を援はんとて、高根に昇れば自ら、神に倆しと覺えしぞ。

大勢　そりやこそ神様ぢや〳〵

成政　されば我等を通さうやぢまて。

狩人の一　通す段か、鎮守様の輿に越せて、村堺まて送り申すわ。

大勢　それがよい〳〵。

成政　忍びの旅に無用なるぞ。

大勢　はい〳〵。

從士の一　深山を出でて人里ありと、

同二　喜びたるも束の間に、

同三　思ひがけなき狩人達。

小百合　如何なる事にならうかと、案じ煩らふ隙も無く

成政　山國育ちの正直とて、心を置かぬ人々、志成る上からは、能き返報を與へうぞ。

成政　天に克ち、地に克ち、人に克ちたるよ。

激しき吹雪。小百合成政に縋る。

（幕）

なゝつ桔梗　終

明治三十九年九月十五日印刷
明治三十九年九月十八日發行

なゝつ桔梗奥付
定價金四拾錢

著作者　山崎小三
發行者　東京市日本橋區上槇町十番地　今津隆治
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎

株式會社秀英舍印刷

著作權所有

發行所　東京市日本橋區上槇町　如山堂書店

特約店　東京神田　東京堂。上田屋。同日本橋　北隆館。前川。文林堂。玉誠堂
大阪　杉本褒。久留米。菊竹金文堂。名古屋。星野。川瀬。札幌　富貴堂

1/11/39

平木白星君著　水島爾君畫　新刊

劇詩 釋迦

釋迦降寛の古説話は佛教の神髄也。この絶好詩題を描くに著者獨創の新文體を以てす。正にこれ天上天下唯一の快文字

絶倫の美本
全壹冊
正價金六十五錢

近刊

家庭小説	松風村雨	匿名子著 鏑木清方君畫
西歐名著	海光集	馬場孤蝶君著
第一	机の塵	萬朝報拔萃

豫告

如山堂新刊書目

林甕臣君著、東久世伯題、松浦伯題、渡邊國武君序、上田博士序

◎**日本語原の研究**　全壹冊　正價金七十五錢　郵稅八錢

國語は如何にして生れたる乎。本書は著者が五十餘年の研鑽に成れる、術界空前の一大創説也

與謝野晶子女史著　中澤弘光君畫

◎**舞姫**　全壹冊　正價金七十錢　郵稅六錢

豐麗、奔放、沈痛、酒脫、奇警、を縱ゝ備へたる著者最近の短詩集はこれ。

小島烏水君著　三宅克巳、中澤弘光、兩君畫

◎**山**　全壹冊　正價金四拾五錢　郵稅六錢

增訂五版

不二山

其森林、裙野、湖沼を詩的、繪畫的、科學的に極力縱横描寫せるもの。

中澤弘光、杉浦朝武、マックス、三君畫

◎**あやめ會詩集第一卷**　全壹冊　正價金六拾錢　郵稅六錢

文壇破天荒の快事業として喧々喧傳せられたる日英米の詩人の大合同たるあやめ會の第一詩集なり。

前田林外君著　和田英作君畫

◎**花草**　全壹冊　正價金四拾錢　郵稅六錢

幽婉若き尼の如く慘憂愛の屍の如き情景は本書の外に求むべからず。

小山内八千代女史著　久保田米齋君畫

◎**門の草**　全壹冊　正價金五拾錢　郵稅六錢

閨秀作家の新異彩たる著者得意の美文、小説、のくさ〳〵誰ぞ之をあげて机上の花とし賜ふ君は？

如山堂新刊書目

◎**耶蘇の戀**　全壹冊　正價金三十五錢　郵稅四錢
平木白星君著　墓守復の圖挿畫
基督は一生戀を語らざりき、大聖果して戀愛を解せざりしか。本書は此曠古の大疑問に答ふ。
鳥居清忠、大倉耕濤、阪井紅兒三君畫

◎**長詩心中おさよ新七**　全壹冊　正價金三十五錢　郵稅四錢
おさよ何、新七誰、人情の至微と叙事詩の精髓は收めて此書に在り。

◎**伊藤銀月君著　銀月文粹つきの影**　全壹冊　正價金四拾錢　郵稅六錢
美文あり、小說あり、評論あり、紀行あり、字々尖新、句々連珠、眞にこれ文壇稀世の珍。
岡田博士題、幽谷小波戲畫

◎**島崎松琴君著　分類釋評川柳名句選**　全壹冊　正價金三十錢　郵稅四錢
古狂句無慮二千を拔萃し、これを十八部門に分ち一々滑稽的評釋を加へたる斯道唯一の寶典。

◎**落合浪雄君著　樂世觀**　全壹冊　正價金三十錢　郵稅四錢
人生不可解を叫ぶ人、絕對の安心、無限の慰藉を、得んと欲する人は先づ之を見よ。

◎**伊藤銀月著正續　百字文選**　全貳冊各　正價金二十五錢　郵稅四錢

◎**平木白星著　新體詩選七つ星**　全壹冊　正價金三十錢　郵稅四錢

◎**淺岡誠製圖　六十分萬東京近縣圖**　全壹枚　正價金二十錢　郵稅二錢
一名《新測富士見十三州圖》

32
298
Ⓜ

088899−000−9

32−298

七つ桔梗

山崎　紫紅／著

M39
DBK−0082